

長岡京跡・淀城跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一七―四

長岡京跡・淀城跡

2017年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

長岡京跡・淀城跡

2017年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、建物改築工事に伴う長岡京跡・淀城跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

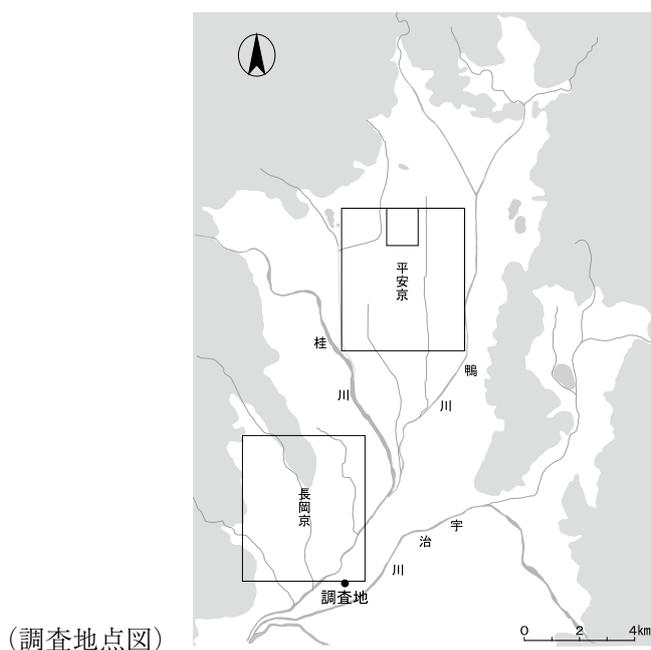
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成29年10月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 長岡京跡・淀城跡（京都市番号 16NG387）
長岡京左京第592次 7AN-YIM-10
- 2 調査所在地 京都市伏見区淀池上町128他
- 3 委 託 者 日本中央競馬会 京都競馬場 場長 横田貞夫
- 4 調査期間 2017年3月21日～2017年5月19日
- 5 調査面積 330㎡
- 6 調査担当者 松吉祐希・津々池惣一
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「納所」・「淀」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 松吉祐希
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。



(調査地点図)

目 次

1. 調査の契機と経過	1
2. 調査地の位置と環境	4
(1) 調査地の歴史的環境	4
(2) 周辺調査	4
3. 遺 構	9
(1) 基本層序	9
(2) 遺 構	9
(3) 淀城築城時の整地	15
4. 遺 物	16
(1) 遺物の概要	16
(2) 土器類	16
(3) 土製品	18
(4) 瓦 類	22
(5) 銭 貨	26
(6) 石製品	28
5. ま と め	29

図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区全景（東から）
		2	2区全景（東から）
図版2	遺構	1	土坑5検出状況（東から）
		2	土坑29検出状況（東から）
		3	ピット25検出状況（東から）
		4	土坑29断面（東から）
		5	ピット47瓦出土状況（北から）
		6	土坑44断面（北から）
図版3	遺構	1	土坑63土器出土状況（南から）
		2	断割トレンチ1南壁断面（北から）
		3	石列6と断割トレンチ2西壁断面（東から）

- 図版4 遺物 土器類、土製品
 図版5 遺物 軒丸瓦
 図版6 遺物 軒平瓦・軒棧瓦
 図版7 遺物 菊丸瓦・丸瓦、銭貨

挿 図 目 次

図1	調査地位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：1,000）	2
図3	断割トレンチの位置図（1：500）	2
図4	調査前全景（東から）	3
図5	重機掘削状況（西から）	3
図6	1区作業風景（北東から）	3
図7	2区作業風景（南から）	3
図8	断割トレンチ3掘削状況（北から）	3
図9	重機による埋め戻し状況（東から）	3
図10	ローラーによる埋め戻し状況（北東から）	3
図11	調査後全景（東から）	3
図12	淀城下町復元図と調査地点（1：5,000）	5
図13	基本層序柱状図（1：40）	9
図14	調査区南壁断面図（1：80）	10
図15	調査区平面図（1：150）	11
図16	土坑5・46・70、ピット25・47実測図（1：40）	13
図17	土坑63実測図（1：10）	14
図18	断割トレンチ2西壁断面図（1：50）	15
図19	整地層出土土器実測図（1：4）	16
図20	江戸時代後期から幕末の土坑出土土器実測図（1：4）	17
図21	土製品実測図1（1：4）	18
図22	土製品実測図2（1：2）	20
図23	土製品実測図3（1：2）	21
図24	軒丸瓦拓影及び実測図1（1：4）	23
図25	軒丸瓦拓影及び実測図2（1：4）	24

図26	軒平瓦・軒棧瓦拓影及び実測図（1：4）	25
図27	菊丸瓦拓影及び実測図（1：4）	26
図28	その他の瓦拓影及び実測図（1：4）	27
図29	銭貨拓影（1：1）	28
図30	石製品実測図（1：4）	28
図31	遺構変遷図（1：300）	29
図32	東曲輪周辺における江戸時代の遺構配置図（1：500）	30
図33	2003年度及び今年度調査における江戸時代前期の整地（1：200）	31

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	6
表2	遺構概要表	12
表3	遺物概要表	16
表4	出土土器一覧表	32
表5	出土土製品一覧表	33
表6	出土瓦類一覧表	34
表7	出土銭貨一覧表	35
表8	出土石製品一覧表	35

長岡京跡・淀城跡

1. 調査の契機と経過（図1～11）

本調査は、京都競馬場淀寮改築工事に伴う発掘調査である。

調査地は、長岡京跡及び江戸時代の淀城跡に位置する。従来、調査地は長岡京左京九条三坊十三町跡にあるとされてきたが、長岡京の条坊復元案が見直された際、本調査地は京域から外れて長岡京域に準じる地域となった。

今回の調査に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」とする）が本調査地の試掘調査を行った。その結果、江戸時代の遺構が残存していることが予測できたため、文化財保護課の指導のもと、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を実施した。今回の調査は江戸時代の淀城跡の遺構や遺物の検出を主な目的とした。

調査区は文化財保護課の指導により設定した。東西30m、南北11mで、調査面積は330㎡。調査期間は2017年3月21日から5月19日である。

調査は、排土を置く場所が限られていたため、調査区西半（1区）を調査した後、東半（2区）の調査を行った。重機や機材の搬入を行い、調査区を設定した後、文化財保護課の臨検を受け、重機掘削を開始した。現代の盛土の掘削を終え、1区の全景写真、遺構の個別写真の撮影を行った。

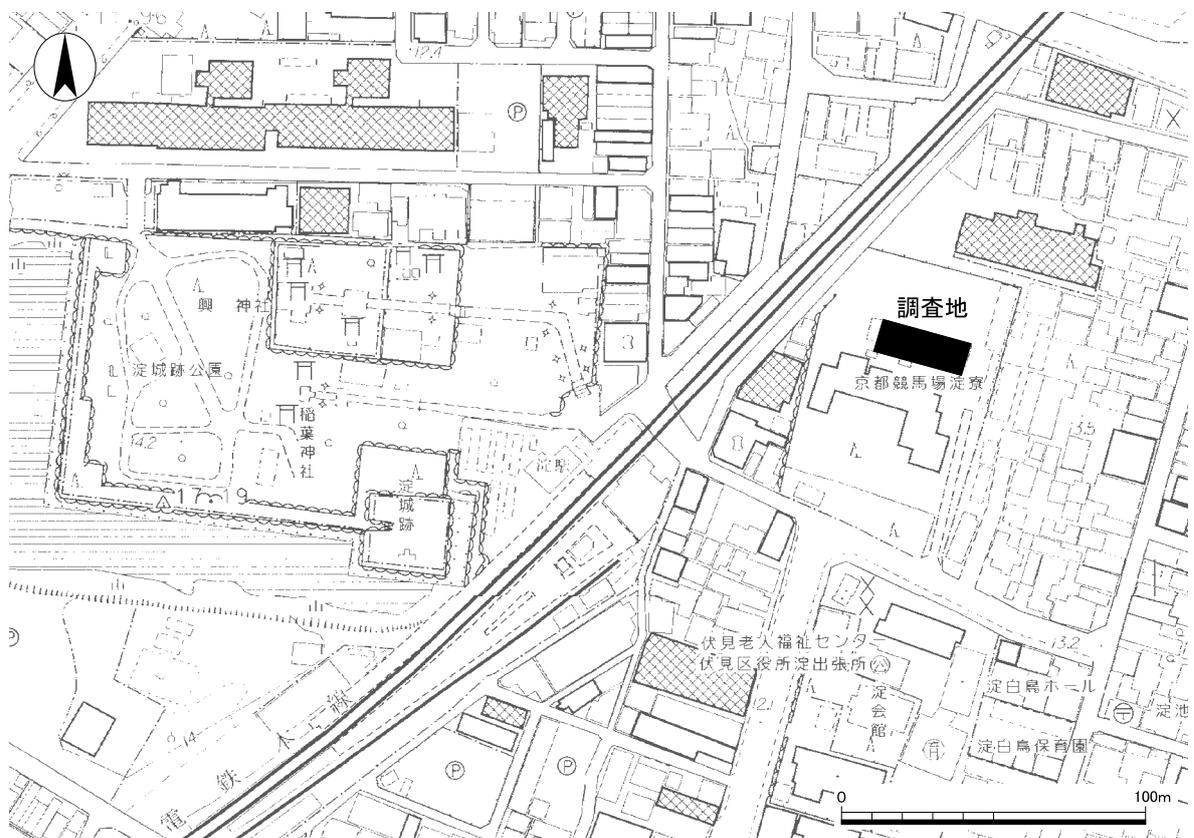


図1 調査地位置図（1：2500）

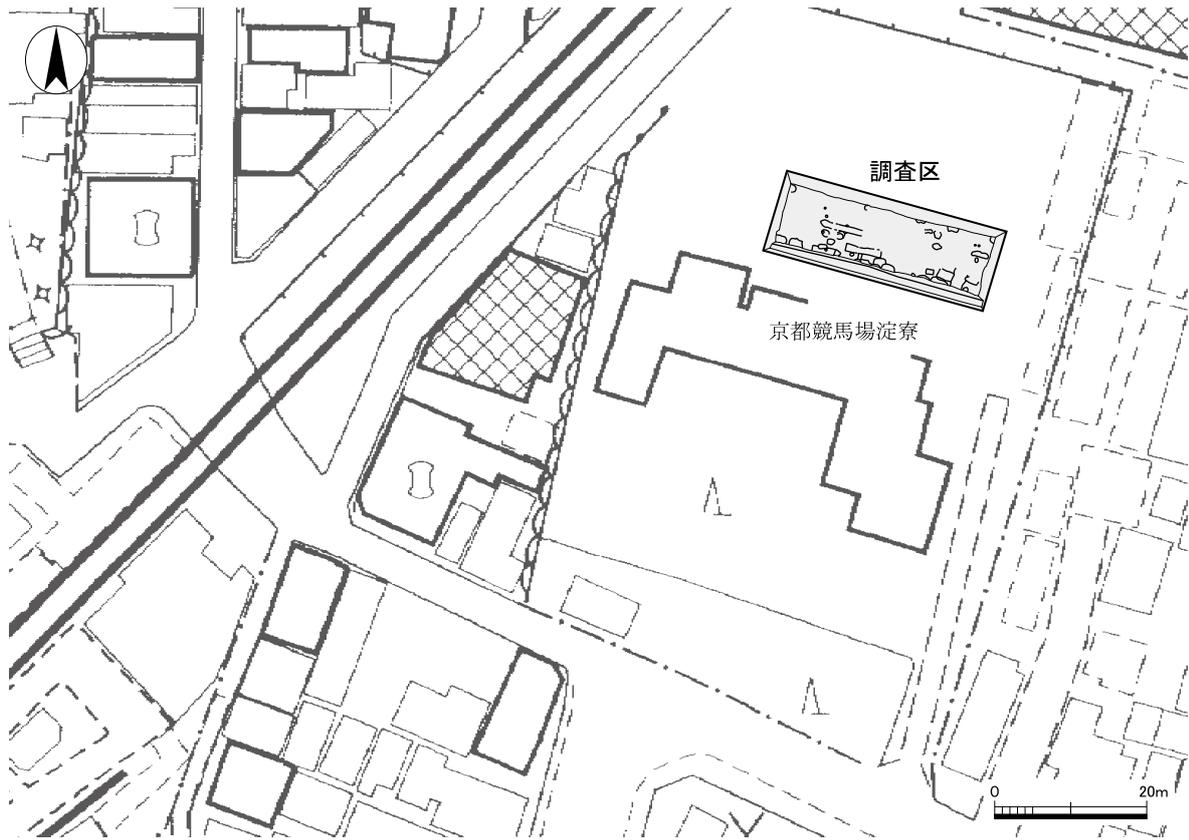


図2 調査区配置図 (1 : 1,000)

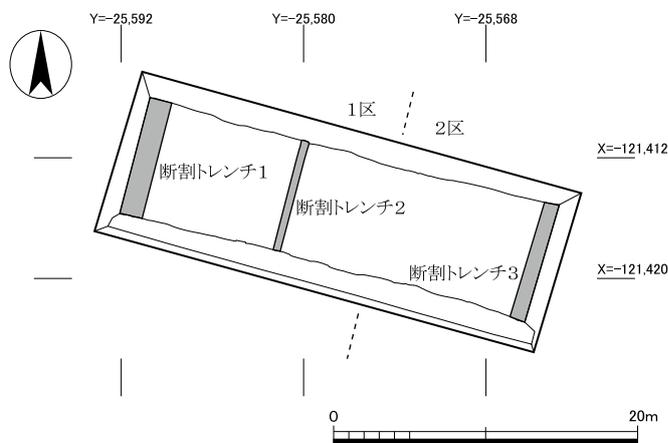


図3 断割トレンチの位置図 (1 : 500)

また、一部遺構の検出状況のオルソ測量を行った。遺構掘削終了後、調査区の西端と中央の2箇所を下層の断ち割り調査（断割トレンチ1・2）を行った。1区の調査を終了し、重機とローラーによる埋め戻しを行った。1区の埋め戻しが終了した後、2区の重機掘削を開始した。2区の遺構を掘削し、全景写真撮影を行った。その後、調査区東端で下層の断ち割り調査（断割ト

レンチ3）を行い、文化財保護課の臨検を受けた。断割調査終了後、重機とローラーによる埋め戻しを行い、すべての調査を終了した。

調査で検出した遺構はすべて人力で掘削を行い、検出した遺構や土層断面は、図面作成・写真撮影などの記録をとった。なお、今回の調査では、工事の関係で掘削深度に制限が存在した（標高10.802m）。そのため、下層遺構に関しては、工事に影響のない範囲で断ち割り調査を行い、状況を確認した。



図4 調査前全景（東から）



図5 重機掘削状況（西から）



図6 1区作業風景（北東から）



図7 2区作業風景（南から）



図8 断割トレンチ3掘削状況（北から）



図9 重機による埋め戻し状況（東から）



図10 ローラーによる埋め戻し状況（北東から）



図11 調査後全景（東から）

2. 調査地の位置と環境

(1) 調査地の歴史的環境 (図12)

調査地の存在する淀の地は、古代から中世にかけて桂川、宇治川、木津川の三川合流地点であり、平安時代には平安京の外港「淀津」として栄えた。中世になると中島(旧淀駅周辺)に「魚市」が存在し、都に運ばれる塩や塩で加工した海産物の販売を一手に掌握した。中世には淀城が築城され、天正16年(1588)には豊臣秀吉の修築により側室である茶々の産所とされた。この時期の淀城は、江戸時代に築かれた淀城から北に約500mの伏見区納所に所在しており、江戸時代の淀城と区別するため「淀古城」と呼ばれる。この淀古城は伏見城築城に伴い、文禄3年(1594)に破却された。

江戸時代に入り、元和9年(1623)に伏見城廃城が決定したことから、江戸幕府は京都を守護する城として淀城を建設することとした。松平定綱が淀藩の居城・淀城の築造を命じられ、三万五千石で入封した。以降、譜代大名が歴代藩主となった。寛永10年(1633)には永井尚政が城主となり、寛永14年(1637)より木津川の付け替え工事を行い、城下町の拡張がなされた。寛文9年(1669)に石川憲之、正徳元年(1711)に戸田光熙、享保2年(1717)に松平乗邑が城主となった。享保8年(1723)に稲葉正知が城主となってからは、幕末までの約130年間を稲葉家が城主を務めた。宝暦6年(1756)には落雷により天守が焼失し、それ以降再建されなかった。慶応4年(1868)の鳥羽伏見の戦いに際し、城下は焼失し大きな被害を受けた。明治4年(1872)の廃藩置県に伴い、淀藩は廃藩となった。

調査地は淀城の東曲輪の北部にあたる。この東曲輪や南の曲輪、内高嶋は、淀藩の蔵や家臣の屋敷が並ぶ地域であり、東曲輪東側の街道沿いは町人の町屋域、その東側と西側は下級武士の居住域であった。

(2) 周辺調査 (図12・32、表1)

本調査地の周辺では、これまで淀城の本丸や二の丸、東曲輪、本丸東南部において調査が行われている。以下、今回の調査地が所在する東曲輪で行われた調査を中心に、江戸時代の東曲輪の様相と淀城築城時に行われた整地について簡潔に記す。

東曲輪は淀城本丸の東側に位置し、周囲を外堀や中堀に囲まれた地区である。東曲輪では、江戸時代の中堀・外堀や石垣、土蔵の基礎、石列などがこれまでに確認されている。

調査13では、東曲輪の北端で、土蔵基礎の北西隅を検出した。この土蔵の基礎は、砂礫が充填された布掘りによる基礎であった。調査14ではこの土蔵の礎石跡と基礎の北側を、調査17-1区では土蔵の基礎の南西隅を確認した。これらの調査から、土蔵の規模は東西40m、南北8mと推察された。この土蔵は、『山州淀城府内之図』(京都府立総合資料館蔵)や『朝鮮人来聘記付図』(18世紀中頃)などの江戸時代の資料から、米蔵とみられる。

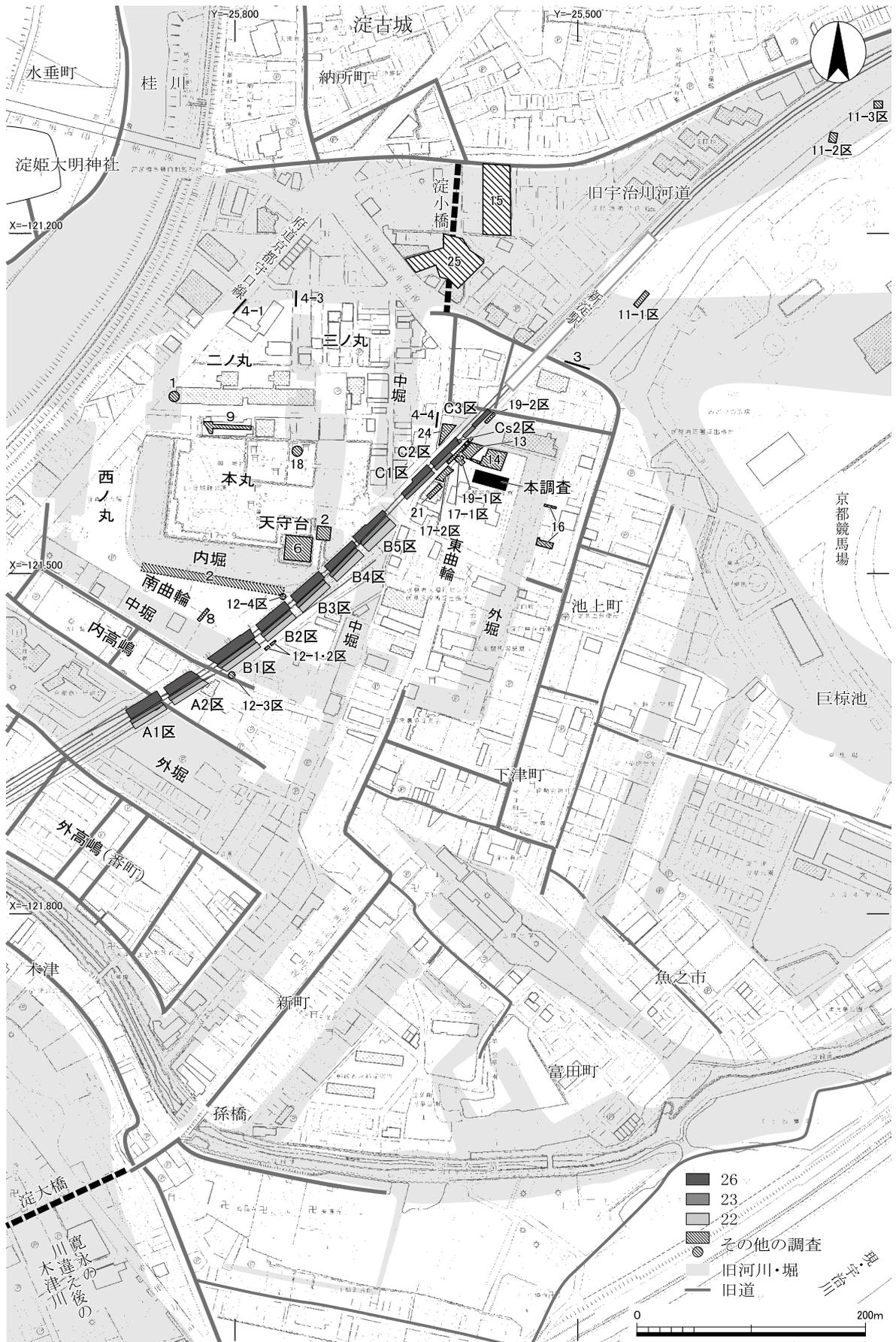


図12 淀城下町復元図と調査地点 (1 : 5,000)

表1 周辺調査一覧表

調査番号	調査地点	調査種類	調査機関	所在地	調査期間	面積 (㎡)	主な成果	文献番号
1	二ノ丸西側内堀	試掘		淀本町	1976.12		二ノ丸西側の内堀東辺の石垣検出。	7の表23-1
2	本丸天守台、内堀南辺石垣	立会・試掘、石垣調査	淀城跡調査団	淀城跡公園	1977.8~9 1978.3~5		天守台4面石垣立面図作成。天守台南西隅を試掘、石蔵の存在を確認。北東角を試掘犬走りの状況を確認。内堀南辺の石垣を検出(A~F)。	1・2
3	城下北端部	立会		淀池上町地内	1984.6~		北面する石垣を検出、旧宇治川の護岸石垣か。	7の表23-7
4	二ノ丸北端部	立会		淀本町ほか	1984.8~		1・3地点：人頭大の集石を検出、旧宇治川の護岸石垣か。4地点：東西方向の石垣検出。	7の表23-8
5	本丸屋敷南西隅橋台	立会		淀城跡公園	1986.8~10		石垣改修工事に伴っての立会調査。	1・2
6	本丸天守台、西・南・天守台石垣	発掘、石垣石材調査	淀城跡調査団	淀城跡公園	1987.7.30 ~11.15		天守台：石蔵(地下室)の存在明らかになり、柱礎石などを検出。全面が著しく焼けている(宝暦6年の落雷)。石垣調査：全面の石材計測・図化と刻印・墨書などの有無の確認。	3~5
7	本丸天守台	石垣改修工事	市建設緑地部	淀城跡公園	1989.8 ~1990.3		天守台の四周石垣の積替え改修工事が実施された。	6
8	内堀・内高嶋	試掘	埋文研	淀本町174-62、148-1	1990.10.1	36.4	内堀及び北面する内高嶋南辺の石垣。	7
9	本丸北側	試掘	市埋セ	淀本町173-10	1996.2.7~9	129	本丸と二ノ丸の境界となる逆「L」字状の石垣を検出。	8
10	城外北西部	試掘	埋文研	葭島渡場町32(京都競馬場内)	1998.3.3 ~4.21	300	5箇所の調査区。GL-2mまで現代盛土、以下湿地状堆積。	9
11	城外北西部	試掘	埋文研	納所町(京都競馬場北西外周道路)	1999.8.16 ~9.3	115	3箇所の調査区。GL-2mまで現代盛土、以下1区では時期不明遺構面、2・3区では流路・湿地状堆積。	10
12	南曲輪、内高嶋、内堀、中堀	試掘	市埋セ	淀池上町(京阪電鉄構内)	2003.2.17、 11.10・13	22	1区：土坑、2区：内高嶋相当部で東西方向石垣、3区：中堀南辺の石垣、4区：内堀南辺の石垣裏込め。	11
13	東曲輪	発掘	埋文研	淀池上町地内	2003.11.7 ~2004.1.19	200	14の西側。淀城期：布堀基礎建物の西延長部検出。	12
14	東曲輪	発掘	埋文研	淀池上町	2003.11.13 ~2004.1.21	280	淀城期：布堀基礎の長大な建物(土蔵)を検出、絵図などにみられる「米蔵」に相当すると考えられる。	13
15	旧宇治川河道	試掘	市埋セ	納所町560-1ほか	2003.12.25	33	3箇所の調査区。GL-2mまで現代盛土、以下流路・湿地状堆積。	14
16	東曲輪外堀東	試掘	市埋セ	淀池上町38ほか	2004.10.14	14	2箇所の調査区。淀城期：1区で外堀に直交する東西方向の石垣、外堀に連結する小規模な堀か。	15
17	東曲輪	発掘	埋文研	淀池上町地内	2004.11.30 ~2005.3.2	130	2箇所の調査区。淀城期：布堀基礎建物の南西角部、その西の石垣、東曲輪の路面状整地。淀城以前：町屋関連建物・カマド、井戸。	13
18	本丸北東部	試掘	市文保	淀本町167(興杼神社境内)	2006.4.26	3	境内北辺・東辺の石垣が淀城期のものであると確認。	16
19	東曲輪	発掘	埋文研	淀池上町地内	2006.5.8 ~6.13	116	2箇所の調査区。淀城期：東曲輪の区画に関する石垣(石列)、井戸など。	17
20	本丸北西部城内	試掘	市文保	淀木津町~納所下野(京阪電鉄構内)	2006.5.9	28	淀城期：焼土層・溝・整地層など確認。発掘調査を指導。	16
21	東曲輪	発掘	埋文研	淀池上町地内	2006.6.14 ~7.11	64	東曲輪にあたるが、淀城期の遺構残存せず。淀城以前：大坂街道の路面・石列、町屋関連の柱穴など。	18
22	本丸北西部城内	発掘	埋文研	淀池上町地内(京阪電鉄構内)	2006.8.21 ~2007.2.28	1350	A1~2・B1~5区の7箇所の調査区。	19
23	本丸北西部城内	発掘	埋文研	淀池上町地内(京阪電鉄構内)	2010.2.15 ~8.31	980	A1~2・B1~5・C1~3・Cs2区の11箇所の調査区。	20
24	東曲輪	発掘	埋文研	淀池上町地内	2011.2.22 ~3.31	115	淀城期：東曲輪における石垣(角櫓)門礎石(京口門)、中堀。淀城以前：大坂街道およびこれに伴う境界石列、面する建物礎石列など。	21
25	旧宇治川河道	試掘	市文保	淀本町215-2ほか	2011.4.6	28.3	3箇所の調査区。GL-1.2m以下流路・湿地状堆積。	22
26	本丸北西部城内	発掘	埋文研	淀木津町・下津町地内(京阪電鉄構内)	2011.9.22 ~12.7	1727	A1~2・B1~5・C1~3区の10箇所の調査区。	23
27	東曲輪	発掘	埋文研	淀池上町地内	2017.3.21 ~5.17	330	土坑、ピット。	本書

※ 調査機関については、以下のように略記した。

京都市建設局 公園緑地部：市建設緑地部。京都市埋蔵文化財調査センター：市埋セ。

京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課：市文保。財団法人・公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所：埋文研。

※ 調査番号は図4と対応。調査番号22・23・26については、煩雑さを避けるため、図4には共通する調査区名のみを表示した。

調査17-2区では、南北に走る石組や路面を検出した。調査19では、東曲輪北側にあたる外堀の北側・南側の石垣と外堀、石組を検出した。この石組は調査17-2区で検出した石組と同一のものと考えられる。

調査24では、3条の石垣を検出しており、そのうち1条は角槽基礎の石垣とみられる。

調査23-C1区では、東曲輪西側にあたる中堀と堀西側の石垣、調査区南端では中堀の土橋部も確認された。調査23-C2区では、調査区北端で石垣を検出したが、これは調査17-2区、調査19で検出した石組の北東隅部とみられる。調査23-C3区では、調査地が東曲輪北側の外堀の内部であることを確認した。

調査26-C1区では、階段状石列とその西側で中堀を検出した。調査26-C2区では、3条の石列を検出した。これらの石列のうち2条は同一の構造物と推測する。調査26-C3区では、東曲輪北側の外堀の内部であることを確認した。

つぎに、淀城築城時に行われた整地についての調査成果を記す。

調査13・14・17の調査では、淀城築城に際して1.5m以上の盛土を行い整地していることを確認した。東曲輪の外周に当たる部分に締まりの良いシルト質の土砂で堤状の高まりを形成し、その間に砂礫を充填して整地していた。

東曲輪の北端にあたる調査19-1区Aでも、全長12mの堤状の高まりを東西方向に形成し、その上に礫混じりの土砂を盛り、粗砂で最終的に整地をした状況を確認している。

さらに調査22-A2区や調査23では、内高嶋の整地方法も明らかとなった。この内高嶋は、17世紀前半の淀城拡張時に新たに造成された地区である。整地方法としては、粘質土や微砂・粗砂を下層から互層に堤状に盛土をし、その両側を粗砂で盛土した後に、砂礫や粘質土などを互層に積んで最終的な整地を行っていた。

また調査21では、江戸時代の遺構は確認できなかったものの、淀城築城時の整地層に多量の焼土や炭化物、焼けた壁土などが混入していたことが確認できた。調査23や調査24でも、同様の状況が報告されている。このことから、淀城築城以前に存在した建造物が火事などで焼失し、その焼土などを淀城築城の際に片付け、整地したと推察する。

このように、淀城東曲輪の北半部での調査は、淀城の他地区と比較して進んでおり、江戸時代の様相が明らかとなりつつある。

文献一覧（番号は表1の文献番号に同じ）

- 1 星野猷二・三木善則『器瓦録想 其の三 淀城』伏見城研究会 2007年
- 2 江谷 寛・三木善則・西野浩二『淀城天守台発掘調査報告書』伏見城研究会 2017年
- 3 星野猷二・藤井重夫『淀城跡調査概要 I（淀城跡・天守台調査概報）』京都市建設局公園管理課・淀城跡調査団（伏見城研究会）1988年
- 4 江谷 寛「発掘から見た淀城天守閣」『淀の歴史と文化』淀観光協会 1998年
- 5 藤井重夫「石垣に残る刻印」『淀の歴史と文化』淀観光協会 1998年

- 6 中村石材工業株式会社『淀城跡公園石垣改修工事報告書』京都市建設局公園緑地部 1990年
- 7 久世康博「淀城跡(TB29)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局 1991年
- 8 馬瀬智光「淀城跡 No.21」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成8年度』京都市文化市民局 1997年
- 9 吉崎 伸「長岡京左京九条四坊」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 10 上村和直「長岡京左京九条四坊」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 11 馬瀬智光「長岡京跡・淀城跡 No.17」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成15年度』京都市文化市民局 2004年
- 12 内田好昭「長岡京跡・淀城跡(2次・3次調査)」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2006-3 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 13 内田好昭『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-13 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 14 「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成15年度』京都市文化市民局 2004年
- 15 馬瀬智光「長岡京跡・淀城跡 No.102」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成16年度』京都市文化市民局 2005年
- 16 「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成18年度』京都市文化市民局 2007年
- 17 尾藤德行「長岡京跡・淀城跡(4次調査)」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2006-3 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 18 尾藤德行「長岡京跡・淀城跡(5次調査)」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2006-23 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 19 尾藤德行・丸川義弘・能芝 勉「淀城跡(6次調査)」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2006-23 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 20 尾藤德行・長戸満男・南出俊彦『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2010-7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010年
- 21 尾藤德行『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2010-17 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 22 「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成23年度』京都市文化市民局 2012年
- 23 高橋 潔・菅田 薫・竜子正彦『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2011-7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図13・14)

調査区内は全体的に現代の攪乱による削平が激しく、調査区北側では現代の盛土直下で江戸時代前期の整地層を確認した。調査区南端では、現地表面より1.1～1.2mは現代の盛土であったが、その下層において近代の盛土、江戸時代後期の整地層、江戸時代前期の整地層を確認した。江戸時代後期の整地層はⅠ層・Ⅱ層に分かれる。また補足調査として、調査区西端・中央・東端の3箇所ですり割り調査を行い、江戸時代前期の整地層を確認した。この江戸時代前期の整地は、淀城築城時に行われたものとみられる。

今回は、江戸時代前期の整地層上面(標高11.7～11.9m)で調査を行い、江戸時代前期から中期、後期から幕末の遺構を検出した。

(2) 遺 構

江戸時代前期から中期、江戸時代後期から幕末の土坑やピットを検出した。土器や瓦を廃棄した土坑が多いが、埋土に漆喰が多く含まれる土坑や一分金が出土した土坑も確認できた。

また、江戸時代後期から幕末にかけての土坑を南壁際で多数検出した。これらの土坑は、江戸時代後期の整地層上面から掘り込まれた土坑であることを、南壁断面で確認した。

なお、土坑の規模は、遺構を検出した際の計測値である。以下、主な遺構について簡潔に記す。

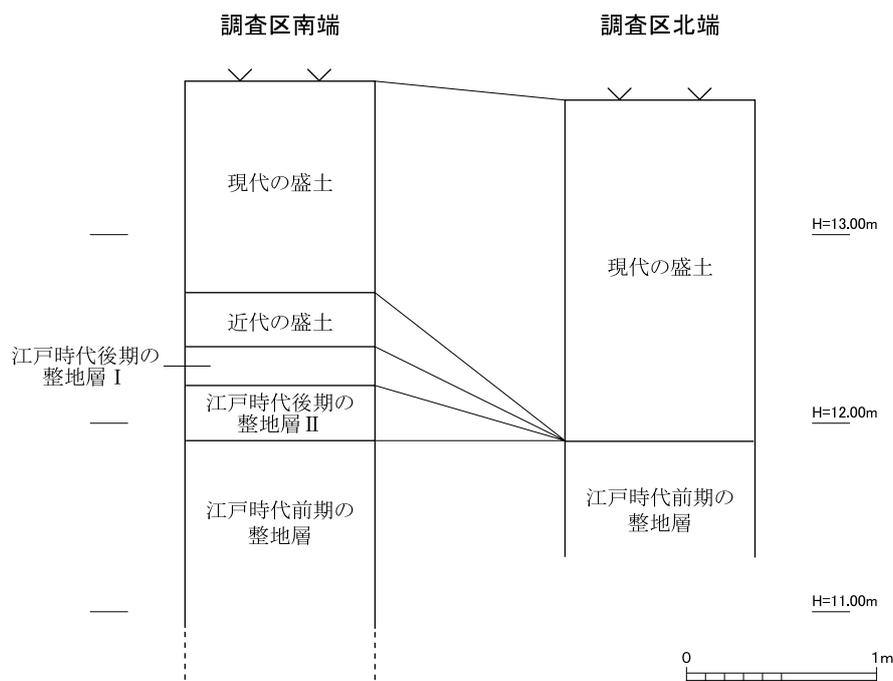


図13 基本層序柱状図 (1:40)

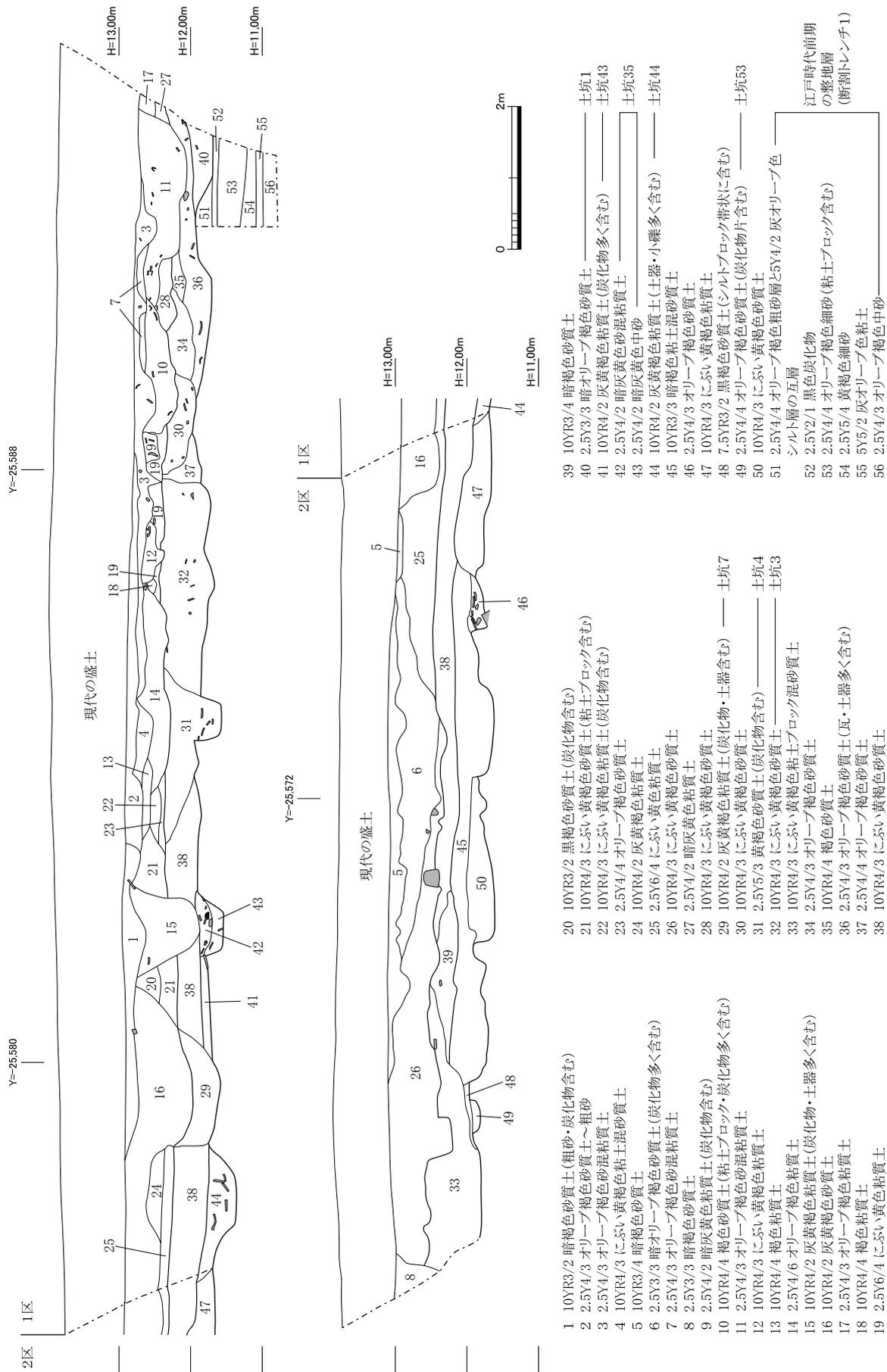


図14 調査区南壁断面図 (1 : 80)

- 1 10YR3/2 暗褐色砂質土(粗砂・炭化物含む)
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土～粗砂
- 3 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂混粘質土
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土混砂質土
- 5 10YR3/4 暗褐色砂質土
- 6 2.5Y3/3 暗褐色砂質土(炭化物多く含む)
- 7 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂混粘質土
- 8 2.5Y3/3 暗褐色砂質土
- 9 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土(炭化物含む)
- 10 10YR4/4 褐色砂質土(粘土・炭化物含む)
- 11 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂混粘質土
- 12 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
- 13 10YR4/4 褐色粘質土
- 14 2.5Y4/6 オリーブ褐色粘質土
- 15 10YR4/2 灰黄褐色粘質土(炭化物・土器多く含む)
- 16 10YR4/2 灰黄褐色砂質土
- 17 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土
- 18 10YR4/4 褐色粘質土
- 19 2.5Y6/4 にぶい黄褐色粘質土

- 20 10YR3/2 黒褐色砂質土(炭化物含む)
- 21 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土(粘土・炭化物含む)
- 22 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土(炭化物含む)
- 23 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質土
- 24 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
- 25 2.5Y6/4 にぶい黄褐色粘質土
- 26 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土
- 27 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
- 28 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土
- 29 10YR4/2 灰黄褐色粘質土(炭化物・土器含む)
- 30 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土
- 31 2.5Y5/3 黄褐色砂質土(炭化物含む)
- 32 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
- 33 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土・炭化物混砂質土
- 34 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土
- 35 10YR4/4 褐色砂質土
- 36 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土(瓦・土器多く含む)
- 37 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質土
- 38 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土

- 39 10YR3/4 暗褐色砂質土
- 40 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土
- 41 10YR4/2 灰黄褐色粘質土(炭化物多く含む)
- 42 2.5Y4/2 暗灰黄色砂混粘質土
- 43 2.5Y4/2 暗灰黄色中砂
- 44 10YR4/2 灰黄褐色粘質土(土器・小礫多く含む)
- 45 10YR3/3 暗褐色粘土混砂質土
- 46 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土
- 47 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
- 48 7.5YR3/2 黒褐色砂質土(シルト・炭化物片を含む)
- 49 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質土(炭化物片を含む)
- 50 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土
- 51 2.5Y4/4 オリーブ褐色粗砂層と5Y4/2 灰オリーブ色シルト層の互層
- 52 2.5Y2/1 黒色炭化物
- 53 2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂(粘土・炭化物片を含む)
- 54 2.5Y5/4 黄褐色細砂
- 55 5Y5/2 灰オリーブ色粘質土
- 56 2.5Y4/3 オリーブ褐色中砂

江戸時代前期
の整地層
(断面トレンチ1)



Y=-25,588

Y=-25,580

Y=-25,572

Y=-25,564

X=-121,408

X=-121,416

X=-121,424



※ A-A'は図18に對応

図15 調査区平面図 (1 : 150)

江戸時代前期から中期の遺構（図15、図版1）

土坑5（図16、図版2） 調査区の西側で東西に長い溝状の土坑を検出した。南北約0.8m、東西約5.4m、深さは0.25～0.3mである。この土坑の東側は現代の攪乱により削平を受けており、東端を検出できなかった。しかし、現代の攪乱（東西幅40cm）よりも東側ではこの土坑5の東の続きが確認できなかったため、土坑の全長は最大でも5.8mほどとみられる。土坑の埋土は瓦を大量に含む砂混粘質土であったが、土坑の西半部では瓦を含む層の下に遺物を含まない粘土層（厚さ5～10cm）を確認した。遺物は、土師器・施釉陶器・焼締陶器などの土器類、淀城築城期とみられる大量の瓦が出土した。

ピット25（図16、図版2） 調査区中央で円形のピットを検出した。東西0.5m、南北0.4m、深さ0.3mである。遺物は、土師器・焼締陶器・染付などの土器類、瓦が出土した。

ピット28 調査区中央北端で不整形のピットを検出した。東西0.2m以上、南北0.6m以上、深さ0.2mである。遺物は、瓦片が出土した。

土坑29（図版2） 調査区中央で東西に長い長方形の土坑を検出した。東西約4.7m、南北1.0m、深さは0.2mである。土坑の埋土は漆喰の塊を大量に含む粘質土であった。遺物は、施釉陶器・焼締陶器などの土器類、硯が出土した。

ピット47（図16、図版2） 土坑5の南側で円形のピットを検出した。東西0.45m、南北0.2m以上、深さ0.3mである。ピット47は、重複関係から土坑5よりも古いことがわかる。遺物は、つぼつぼ、瓦が出土した。

土坑53 調査区東側の南壁際で不整形の土坑の北半を検出した。東西0.6m、南北0.5m以上、深さ0.2cmである。遺物は、土師器、施釉陶器、磁器、瓦が出土した。

土坑70（図16） 調査区東端で東西に長い不定形の土坑を検出した。東西2.3m、南北0.55～0.7m、深さ0.15mである。遺物は、土師器・焼締陶器などの土器類、瓦、一分金が出土した。

江戸時代後期から幕末の遺構（図15、図版1）

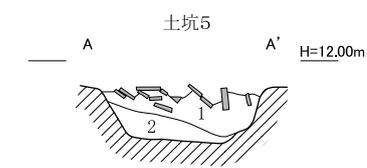
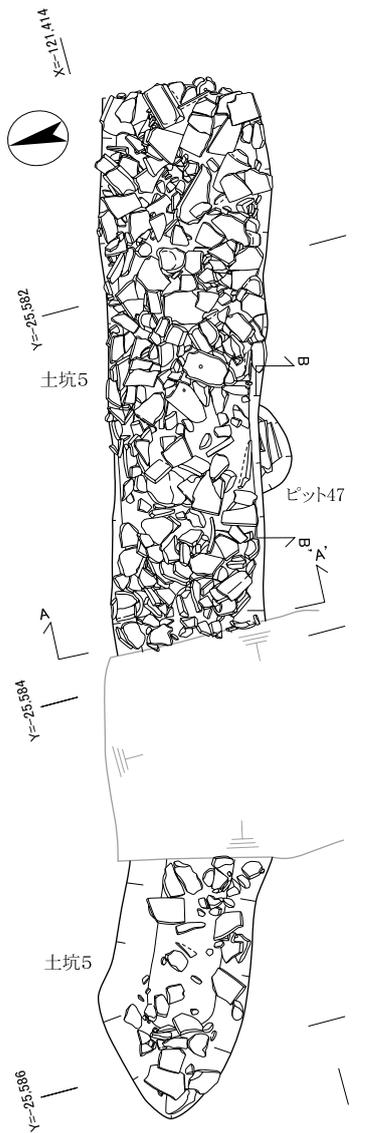
土坑1 調査区南西隅の南壁際で土坑を検出した。東西1.3m、南北0.9m以上、深さ0.2mである。遺物は、土師器・施釉陶器・磁器・焼締陶器などの土器類、土人形・箱庭道具などの土製品、瓦が出土した。

土坑3 調査区西側の南壁際で隅丸方形の土坑の北半を検出した。東西6.6m、南北0.8m以上、深さ0.2mである。遺物は、瓦器・施釉陶器・磁器・焼締陶器などの土器類や土人形、瓦が出土した。

表2 遺構概要表

時代	遺構
江戸時代前期～中期	土坑5・29・53・70、ピット25・28・47
江戸時代後期～幕末	土坑1・3・4・7・35・43・44・46・63

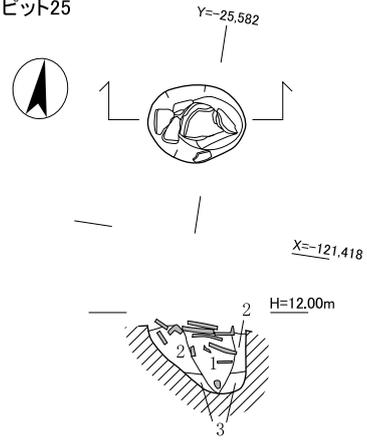
土坑5・ピット47



- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂混粘質土
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土

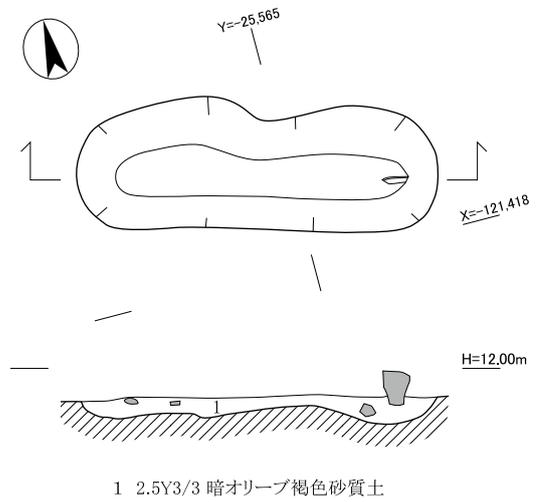


ピット25



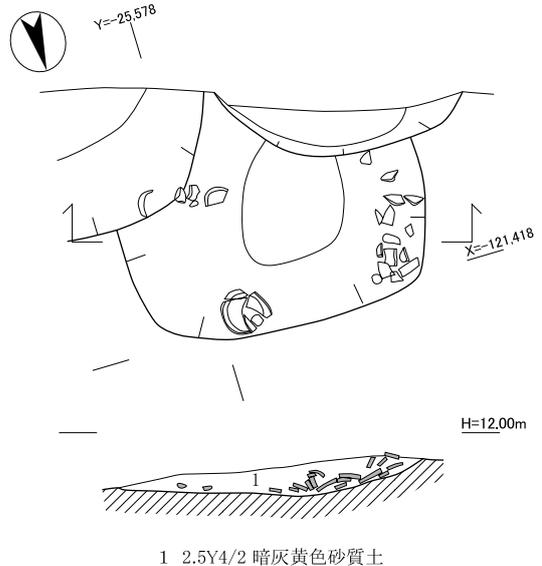
- 1 2.5Y3/2 黒褐色砂質土 (φ3~4cmの礫少量含む)
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土 (炭化物微量含む)
- 3 10YR3/3 暗褐色粗砂混粘質土

土坑70



- 1 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土

土坑46



- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土

図16 土坑5・46・70、ピット25・47実測図 (1:40)

土坑4 土坑3の東端で不整形の土坑の北半を検出した。東西0.7m、南北0.7m以上、深さ0.2mである。遺物は、土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器などの土器類、土人形、土製煙管、瓦、砥石が出土した。

土坑7 調査区中央で不整形の土坑の北半を検出した。東西1.3m、南北0.3m以上、深さ0.2mである。遺物は、土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器などの土器、泥面子、瓦が出土した。

土坑35 調査区中央で不整形の土坑の北半を検出した。東西0.9m、南北0.3m以上、深さ0.25mである。遺物は、土師器・瓦器・施釉陶器などの土器類、土人形、瓦が出土した。

土坑43 土坑7と土坑35の間で、不整形の土坑の北半を検出した。東西1.5m以上、南北0.3m以上、深さ0.1mである。土坑43は、重複関係から土坑7と土坑35より古いことがわかる。遺物は、土師器・焼締陶器・施釉陶器・磁器などの土器類、碁石が出土した。

土坑44 (図版2) 調査区中央で不整形の土坑の北半を検出した。東西1.8m、南北0.8m以上、深さ0.3mである。遺物は、土師器・焼締陶器・染付などの土器、焼塩壺・つぼつぼ・土人形などの土製品、瓦が出土した。

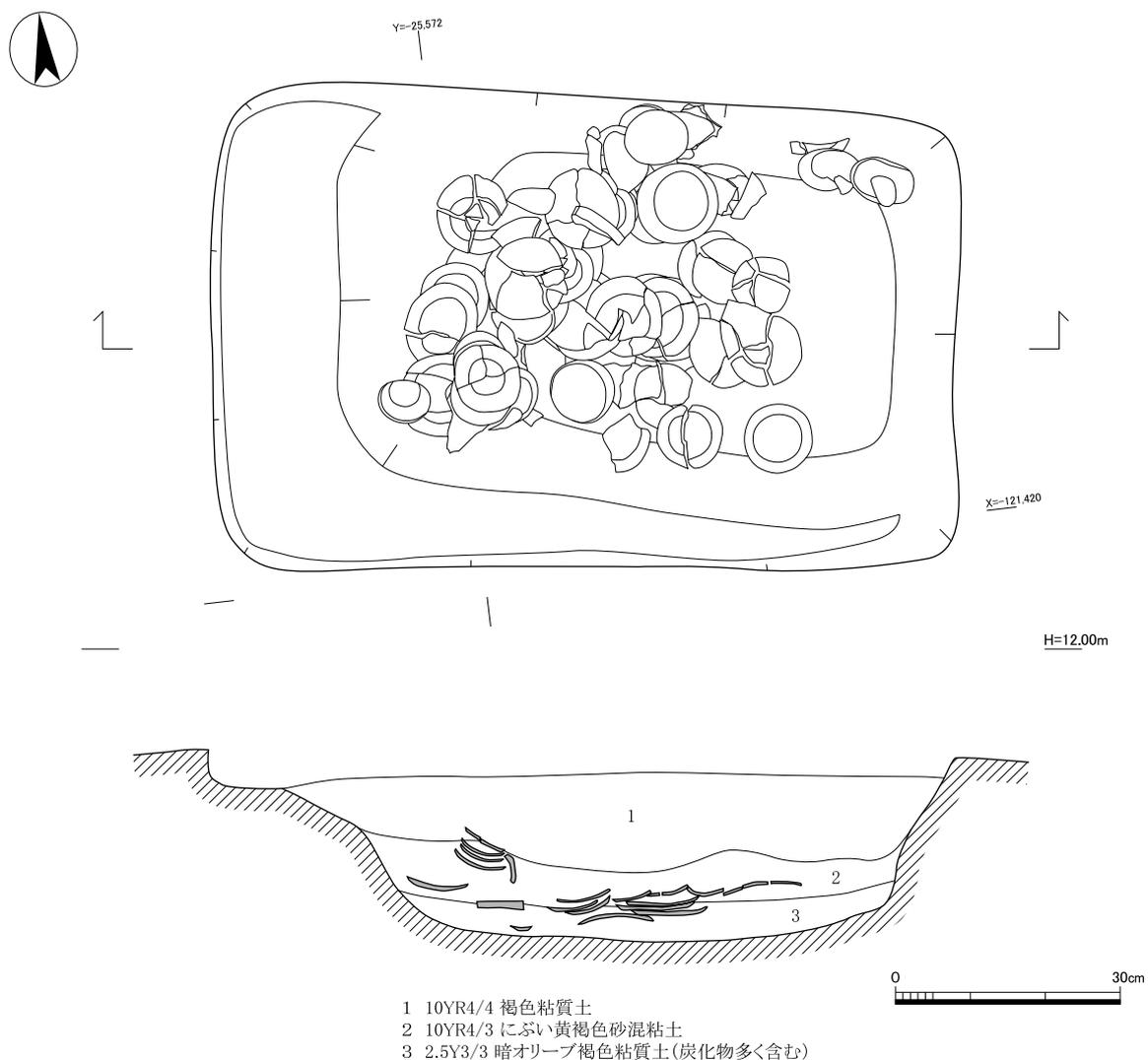


図17 土坑63実測図 (1:10)

土坑46(図16) 土坑7と土坑44の北側で隅丸方形の土坑を検出した。東西1.65m、南北1.3m以上、深さ0.2mである。土坑46は、重複関係から土坑7と土坑44よりも古いことがわかる。遺物は、土師器・焼締陶器・染付などの土器類、ミニチュア皿・土人形・箱庭道具などの土製品、瓦が出土した。

土坑63(図17、図版3) 調査区東側で東西に長い長方形の土坑を検出した。東西2m、南北1.2m、深さは0.5mである。遺物は、京都XIII期とみられる大量の土師器皿のほか、施釉陶器・焼締陶器などの土器類、瓦が出土した。

(3) 淀城築城時の整地(図18、図版3)

前述の通り、補足調査として3箇所ですり割り調査を行い、淀城築城時に行われた整地の様相を捉えることができた。整地方法は以下の通りである。

今回確認した整地層は、上層・中層・下層に分かれる。まず、粗砂を調査区北端が一番高く盛る(整地下層)。その上に、粘質土や細砂・シルトなどを積む(整地中層)。さらに、整地層最上面は粘土や砂質土などを互層に積んで締め固めていた(整地上層)。ボーリング棒での調査により、整地下層の粗砂層は標高約10.5mまで続くことが確認できた。標高10.5m以下は非常に固く締まった層であった。

また、土坑5の北側で20cmほどの石が東西方向に並べられている状況を確認できた(石列6)。この石列は、質の違う土と土との境界に並べられたことが土層断面から確認できることから、整地を行う際の土留めとしての役割をもつとみられる。これらの石は本来整地土中に埋没していると考えられるため、往時の整地土上面はもう少し標高が高かったことが推測される。

断割トレンチ1では、整地中層に炭化物層(図14第52層)が確認できた。この炭化物層は、今回の調査区内の所々で確認することができた。

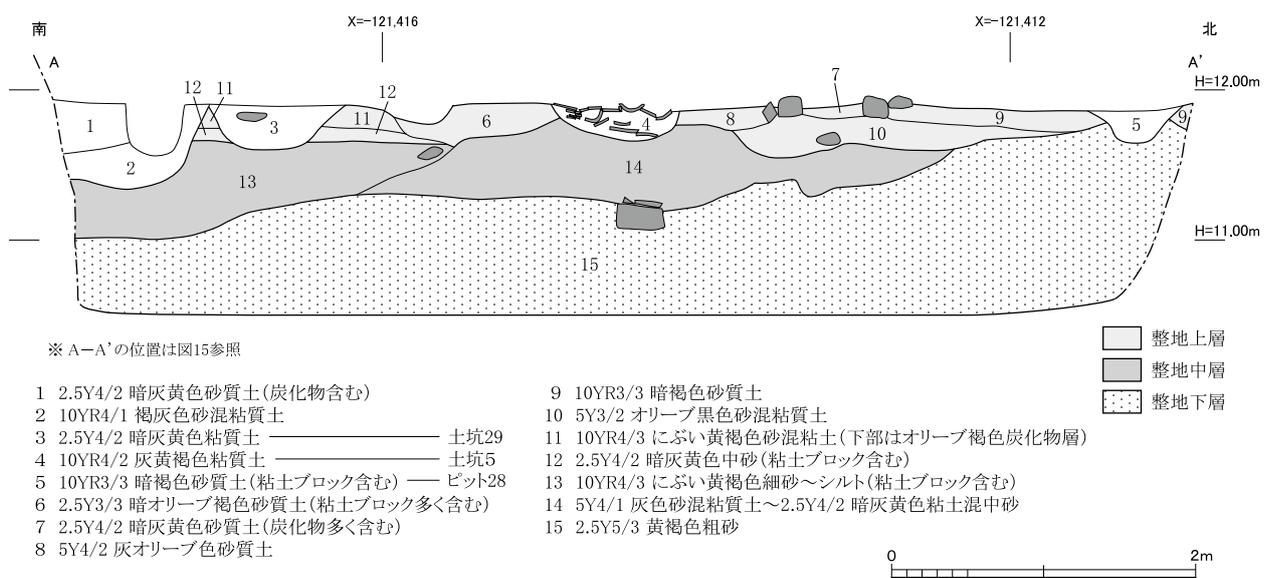


図18 断割トレンチ2西壁断面図(1:50)

4. 遺物

(1) 遺物の概要 (表3)

今回の調査では、遺物整理コンテナ62箱分の遺物が出土した。出土遺物の内訳は、土器類・瓦類が60箱、金属製品が1箱、石製品が1箱である。

出土遺物の時期については、平安京・京都Ⅰ期～XIV期の編年案¹⁾に拠った。

(2) 土器類 (図19・20、図版4、表4)

江戸時代前期から中期 (図19、図版4)

整地層出土土器 (1・2) 1・2は土師器皿S。どちらも口径9.6cmである。2は口縁部内面に油煙が付着する。京都Ⅺ期中段階～Ⅻ期とみられる。いずれも、淀城築城時の整地層である断割トレンチ2の粗砂層から出土した。

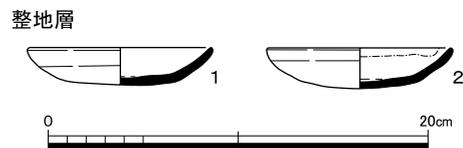


図19 整地層出土土器実測図 (1:4)

江戸時代後期から幕末 (図20、図版4)

土坑63出土土器 (3～51) ほぼ完形の土師器皿が計54点出土した。このうち48点を図化した。3～6は土師器皿Nr。口径5.0～5.2cmである。7～22は土師器皿Sb小。口径7.9～9.0cmである。23～42は土師器皿S大。口径9.8～10.7cmである。これらは京都ⅩⅢ期とみられる。また、これらの土師器皿と共に、在地系とみられる土師器皿も出土した。この皿は43～51の9点で、色調は白色系に近く、胎土は非常に密である。皿Sにみられる底部内面の凹線による圏線とは異なるが、同位置にわずかな凸線で圏線がめぐる。口径11.0～11.4cmである。

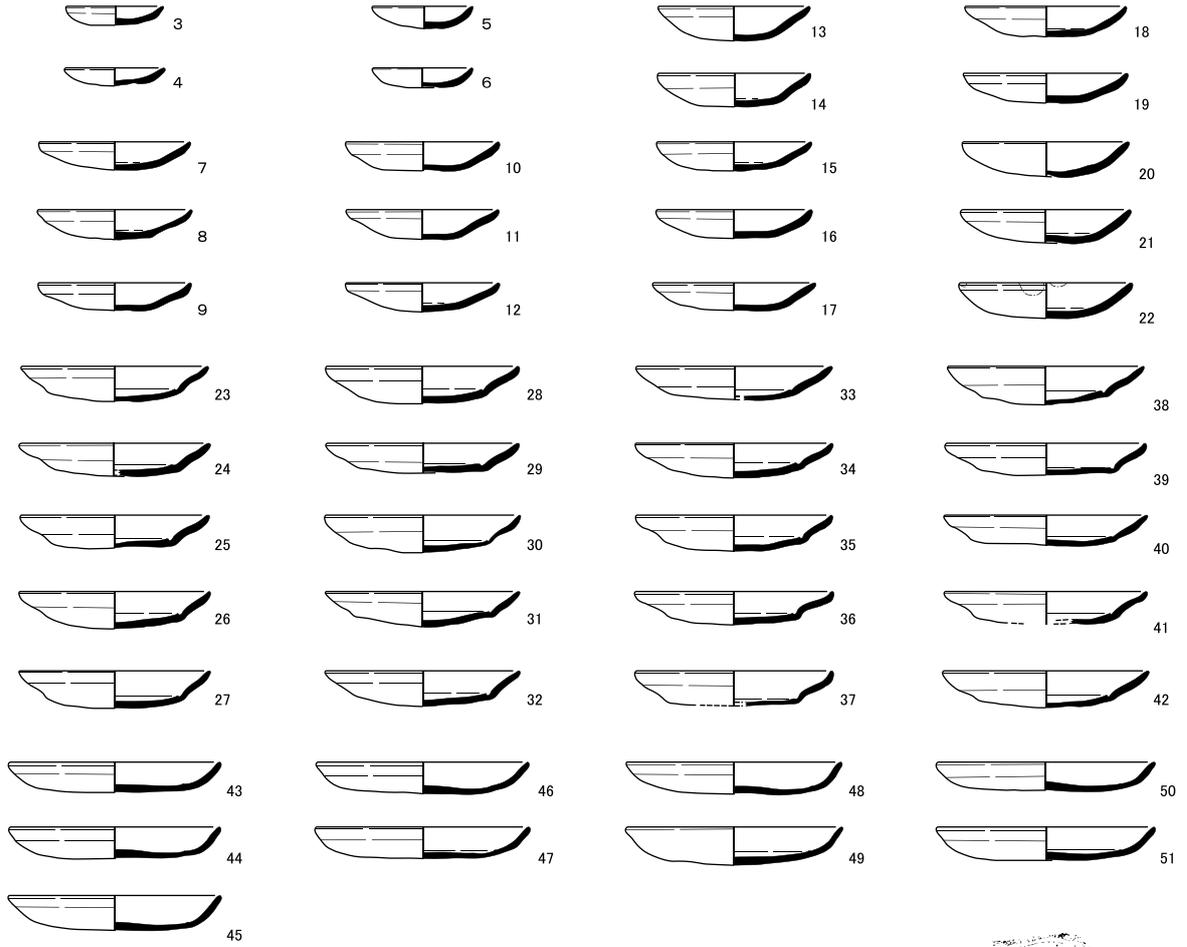
土坑1出土土器 (52) 52は染付小杯。外面に松や竹が描かれる。破断面に焼き継ぎの痕跡がみられる。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
江戸時代前期～中期	土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、土製品、瓦類、銭貨		土師器2点、土製品3点、軒丸瓦21点、軒平瓦14点、菊丸瓦10点、丸瓦2点、平瓦1点、輪違瓦1点、銭貨1点：計55点		
江戸時代後期～幕末	土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、土製品、瓦類、銭貨、金属製品、石製品		土師器50点、施釉陶器4点、焼締陶器1点、磁器4点、土製品28点、軒棧瓦1点、棧瓦1点、銭貨12点、石製品3点：計104点		
合計		69箱	159点 (7箱)	1箱	61箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より7箱多くなっている。

土坑63



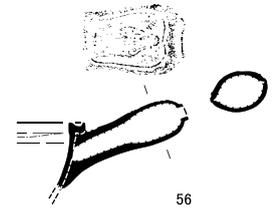
土坑1



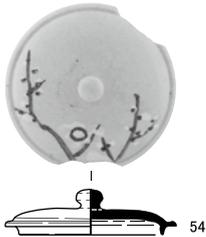
土坑3



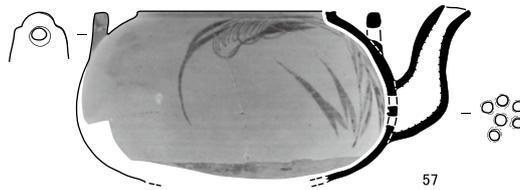
土坑7



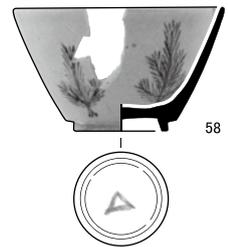
土坑4



土坑35



土坑43



土坑44

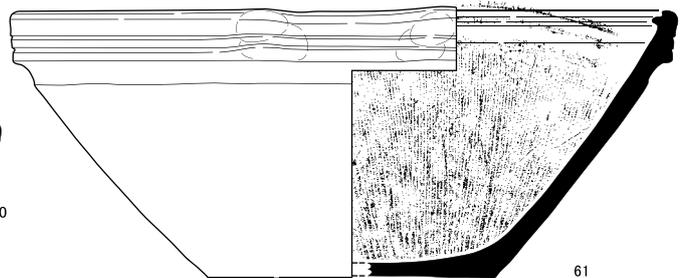
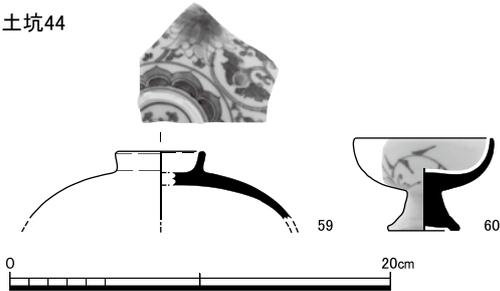


図20 江戸時代後期から幕末の土坑出土土器実測図（1：4）

土坑3出土土器(53) 53は土師器灯火具の身。底部外面には、高台が貼り付けられる。

土坑4出土土器(54) 54は施釉陶器の蓋。京・信楽系。外面中央に丸い扁平なつまみがつく。つまみの周りに白梅とみられる文様が描かれる。

土坑7出土土器(55・56) 55は染付小杯。瀬戸・美濃産。外面に鳥と草実文、内面に草花文が描かれる。非常に光沢がある。高台は釉ハギ。56は鉄釉鍋の把手。上面に型押しにより、髭をたくわえた中国風の人物像が表現される。

土坑35出土土器(57) 57は施釉陶器土瓶。外面に草文が描かれる。S字状の注口部をもつ。

土坑43出土土器(58) 58は施釉陶器椀。京・信楽系。外面に小杉文様が描かれる。底部外面に「△」の墨書がある。

土坑44出土土器(59～61) 59は染付鉢の蓋。肥前産。外面に草花文が密に描かれる。60は染付仏飯具。肥前産。脚付きの小椀で、椀部外面に草文が描かれる。61は焼締陶器播鉢。堺産。底部中央を欠損するのみで、ほぼ完形である。口縁部に縁帯をもち、一部がやや外反し注口となる。口縁部の断面は方形である。体部内面に密な10本1単位の播目を施す。底部内面には三角状の播目が施される。

(3) 土製品(図21～23、図版4、表5)

つぼつぼ(62・63) 62は口径2.2cm、底径1.8cm、器高2.4cm。土坑44から出土した。63は口径2.9cm、底径2.8cm、器高2.2cm。底部中央に穿孔がある。底部外面に、「行ニカ」と墨書される。江戸時代後期の整地層から出土した。

ミニチュア皿(64・65) 64は口径4.9cm、底径3.6cm、器高2.2cm。底部外面に、「行ニカ」と墨書される。土坑46から出土した。65は口径5.0cm、底径3.8cm、器高2.0cm。63・64と同様に底部外面に、「行ニカ」と墨書される。江戸時代後期の整地層から出土した。

焼塩壺(66～69) 66は口径6.0cm、底径5.4cm、器高10.3cm。体部は寸胴、口縁部はヨコナデを施し、体部との境がわずかに屈曲する。底部の粘土の上に、粘土板を輪積みする輪積み成形である。体部外面上部に、「ミなど／藤左衛門」の刻印があり、17世紀前半と考えられる。淀城築城時

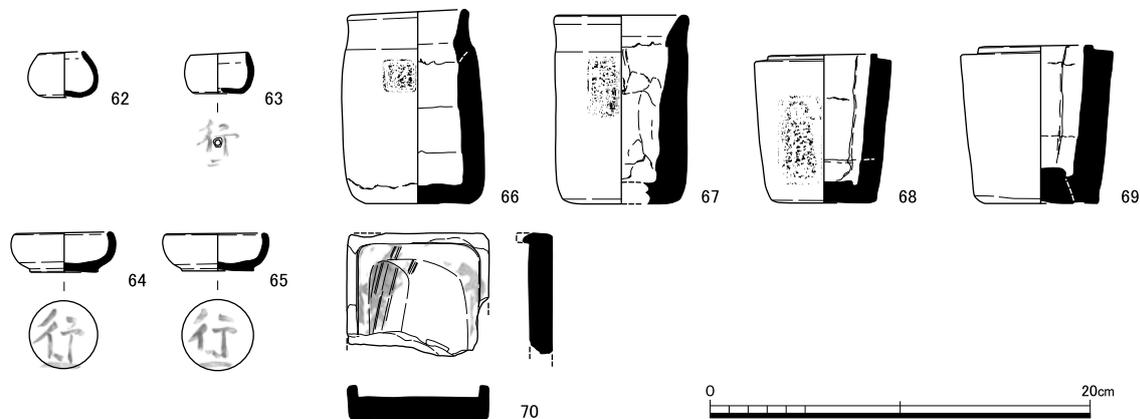


図21 土製品実測図1(1:4)

の整地層である断割トレンチ2の粗砂層から出土した。67は口径6.4cm、底径5.4cm、器高10.0cm。体部は寸胴、口縁部にナデによるくびれがややみられる。輪積み成形。体部外面上部に、「天下一堺ミなど／藤左衛門」の刻印ある。17世紀後半と考えられる。江戸時代後期の整地層から出土した。68は口径5.2cm、底径5.4cm、器高7.9cm。器壁は1.2cm。粘土板を巻き付け、底をつけた板作り成形。体部外面に「泉湊伊織」の刻印がみられる。18世紀後半と考えられる。土坑44から出土した。69は口径5.1cm、底径6.0cm、器高8.4cm。器壁は1.5cm。板作り成形である。18世紀後半と考えられる。江戸時代後期の整地層から出土した。

硯(70) 70は瓦質の硯。陸部のみ残存しており、墨跡や使用による摩耗がみられる。幅7.5cm、厚さ1.9cm。土坑29から出土した。

土人形(71～86) 71は大黒。七福神の1つ。米俵に乗り、右手に小槌、左肩に袋を背負う。型作り。土坑46から出土した。72は恵比寿。七福神の1つ。狩衣を着て左脇に鯛を抱える。底部に棒状穿孔がある。型作り。遺構検出中に出土した。73は布袋。七福神の1つ。福耳、左肩に袋を背負う、太鼓腹。型作りで、背面は剥離する。土坑4から出土した。

74は女性立像。振りのある長い小袖を着て、右腰の前で円形状のものを持つが半分を欠損しており詳細は不明である。首部に棒状穿孔があり、頭部を差し込んでいたとみられる。頭は欠損している。底面に「▷◁」と墨書される。手びねり。土坑3から出土した。75は女性立像。着物を着て、幅広の帯を締める。後ろに回した手には細長いものを持っているが上部を欠損しており不明である。着物や手指は線刻で表現する。首部に棒状穿孔があり、頭部を差し込んでいたとみられる。頭は欠損している。手びねり。遺構検出中に出土した。76は女性座像。帽子(もうす)を頭に被った尼僧とみられる。法性寺の型122に類似²⁾。型作り。土坑4から出土した。77は西行。笠を右手に持ち、風呂敷を背負う立ち姿のもの。泥棒除け、腹痛除けに効用ありとされる。型作り。土坑44から出土した。78は釣り人。笠をかぶり、蓑をまとう。右手には小孔があげられており、釣り竿を刺していたとみられる。笠や蓑の一部に緑で彩色する。江戸時代後期の整地層から出土した。

79は馬。鞍、障泥、鐙をつける。赤と黒で彩色する。手づくね。土坑3から出土した。80は馬の頭部。面繫と手綱が粘土紐を貼り付けて表現される。体部を赤で彩色する。型作り。土坑44から出土した。81は馬の胴部。鞍をつける。型作りで、反対面は剥離する。内面につよいオサエ痕跡が残る。土坑44から出土した。80と同一個体の可能性もあるが、81には胴部に赤彩はみられない。82は牛。棒状の工具による刺突で目を表現する。耳から背中にかけて赤く彩色する。型作り。土坑4から出土した。83は狐。頭に宝珠を載せ、頭と胴体は真正面を向けて台座に乗る。胎土は橙色だが、これはお稲荷さんの使い(眷属)である朱塗りの狐を表現したとみられる。顔部は欠損する。底部に棒状穿孔がある。型作り。土坑46から出土した。84は鷹とみられる。両羽は剥離している。手びねり。土坑35から出土した。85は雉。後頭部に冠羽がみられる。型作り。土坑46から出土した。86は鯛。頭部から背びれにかけて緑釉が施される。底部に棒状穿孔がある。型作り。土坑46から出土した。

箱庭道具(87～89) 87は灯籠。笠や基礎は六角形で、基礎には蓮弁の文様が施される。底部に

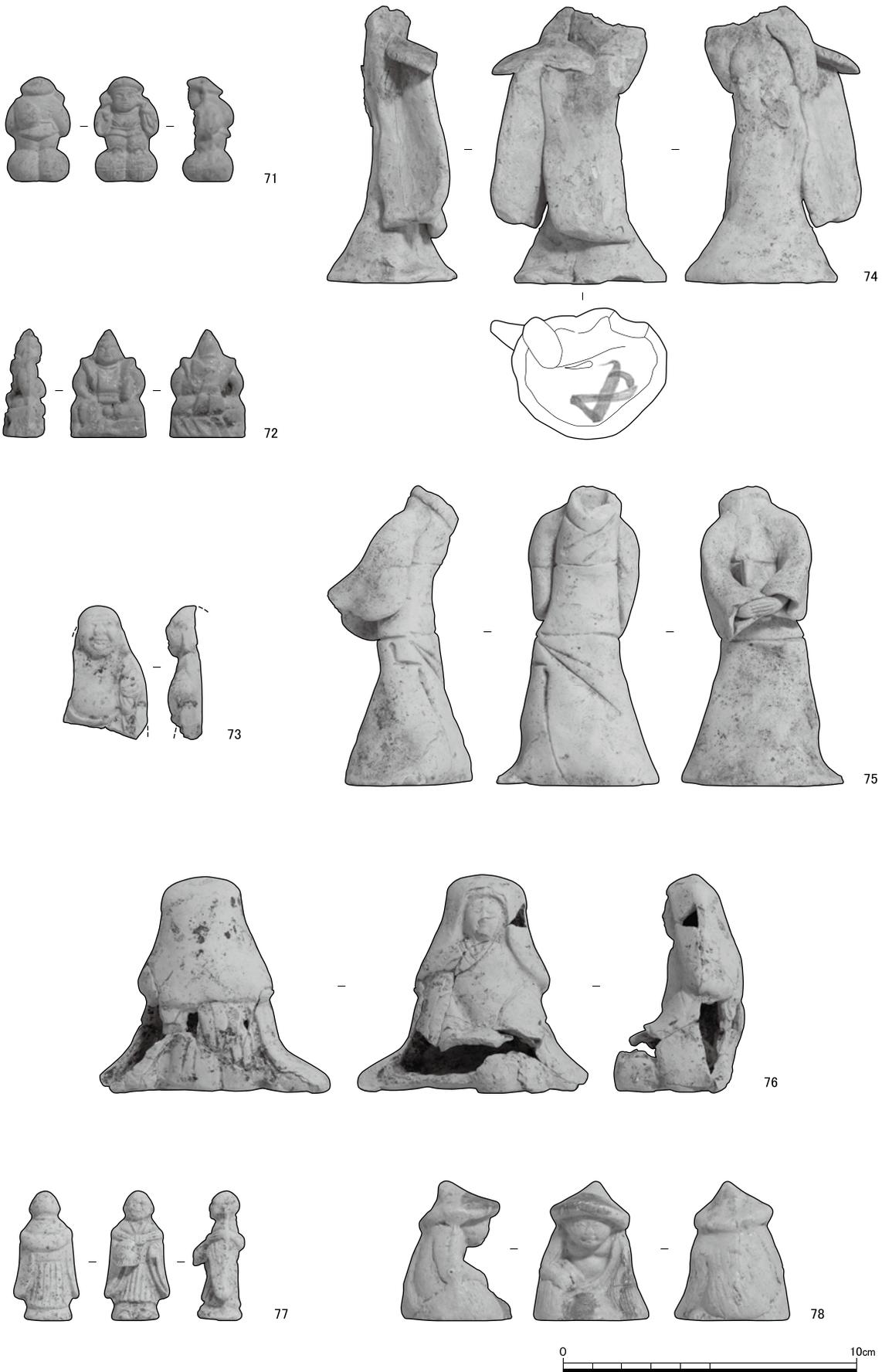


图22 土製品実測図2 (1:2)

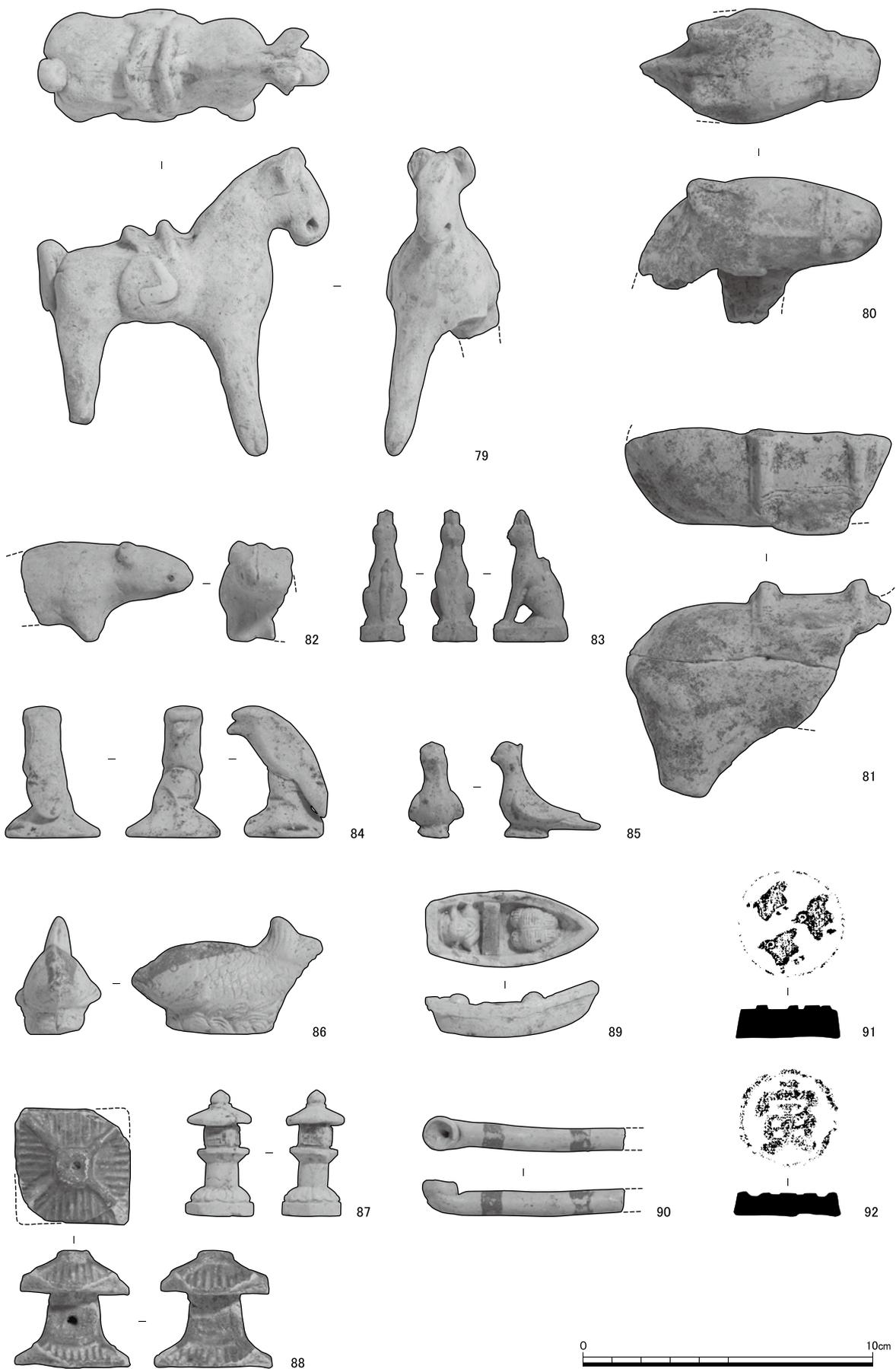


图23 土製品実測図3 (1:2)

棒状穿孔がある。型作り。土坑3から出土した。88は塔。多重塔の最上部とみられる。全体的に緑釉が施される。土坑46から出土した。89は舟。舟尾に人が乗り、舟首に米俵を積む。中央の船橋は緑釉が施される。土坑3から出土した。

煙管(90) 90は土製の煙管。残存長7.0cm。火皿から首部にかけて残存する。首部に褐色のラインが2本入る。土坑4から出土した。

泥面子(91・92) どちらも文様は表面のみで、裏面は無文である。91は直径3.7cm、厚さ1.2cmで、3羽の千鳥が表現される。92は直径約3.8cm、厚さ0.9cmで、十二支の「寅」字が施される。裏側は平坦でない。いずれも土坑7から出土した。

(4) 瓦類(図24～28、図版5～7、表6)

軒丸瓦(図24・25、図版5)

軒丸瓦は34点出土しており、軒丸瓦の文様は巴文のみであった。巴文には、周囲に珠点のつく右巻き三巴文が主であった。それらのうち、残存状態の良好な21点の瓦を図化した。

瓦1～21はいずれも右巻き三巴文で、瓦21を除いて周囲に珠点がめぐる。瓦当の大きさや珠点の数に差異がみられる。瓦5と瓦6は範傷から同範とみられる。範の木目の痕跡が瓦当部によく残存する。瓦7は瓦当部に雲母が多量に付着している。瓦8と瓦9も範傷から同範とみられる。瓦8には、瓦当部と丸瓦を接合する際のカキヤブリがみられる。瓦10は丸瓦の残存状態も良好で、丸瓦に釘孔が穿たれる。瓦12の丸瓦凹部にはヘラ状工具による丸瓦長辺方向のナデがみられる。これは、今回の調査で出土した丸瓦の一部にみられる特徴である。瓦13・14には丸瓦接合部にカキヤブリがみられる。瓦21は小型の巴文で、裏面にカキヤブリがみられる。

軒平瓦(図26、図版6)

軒平瓦は24点出土しており、軒平瓦の文様は唐草文のみであった。残存状態の良好な14点の瓦を図化した。軒平瓦の形式及び時期については、星野猷二氏・三木善則氏の分類³⁾に拠る。

瓦22～26の中心飾りは3葉で、中心に3つの珠文がつく。瓦22～25はE形式で、中心飾りの3葉それぞれに3つの珠文がつき、唐草が2転する。瓦26は、瓦22～25の文様モチーフと同じであるが、3葉で構成される中心飾りの両端2葉の先端が2つに分かれる。1610年頃。

瓦27はF形式で、中心飾りは上に伸びる3葉と、下に短く2葉が表現され、それらの中心に珠文がつく。上に伸びる3葉の間にはさらに2葉が施される。唐草は2転する。1625年頃。

瓦28～31は唐草文が複線となる。唐草は2転する。瓦28～30はK形式。瓦31は中心飾りが複線の3葉で、中心に長円形を、左右に二股に分かれた2葉を置く。1615～1620年頃。

瓦32～35はF形式をもとに展開したとされるO形式。1620～1625年頃。

軒棧瓦(図26、図版6)

軒棧瓦の出土数は数点ほどである。瓦36の文様は唐草文で、上述の軒平瓦O形式である瓦32～35と類似している。

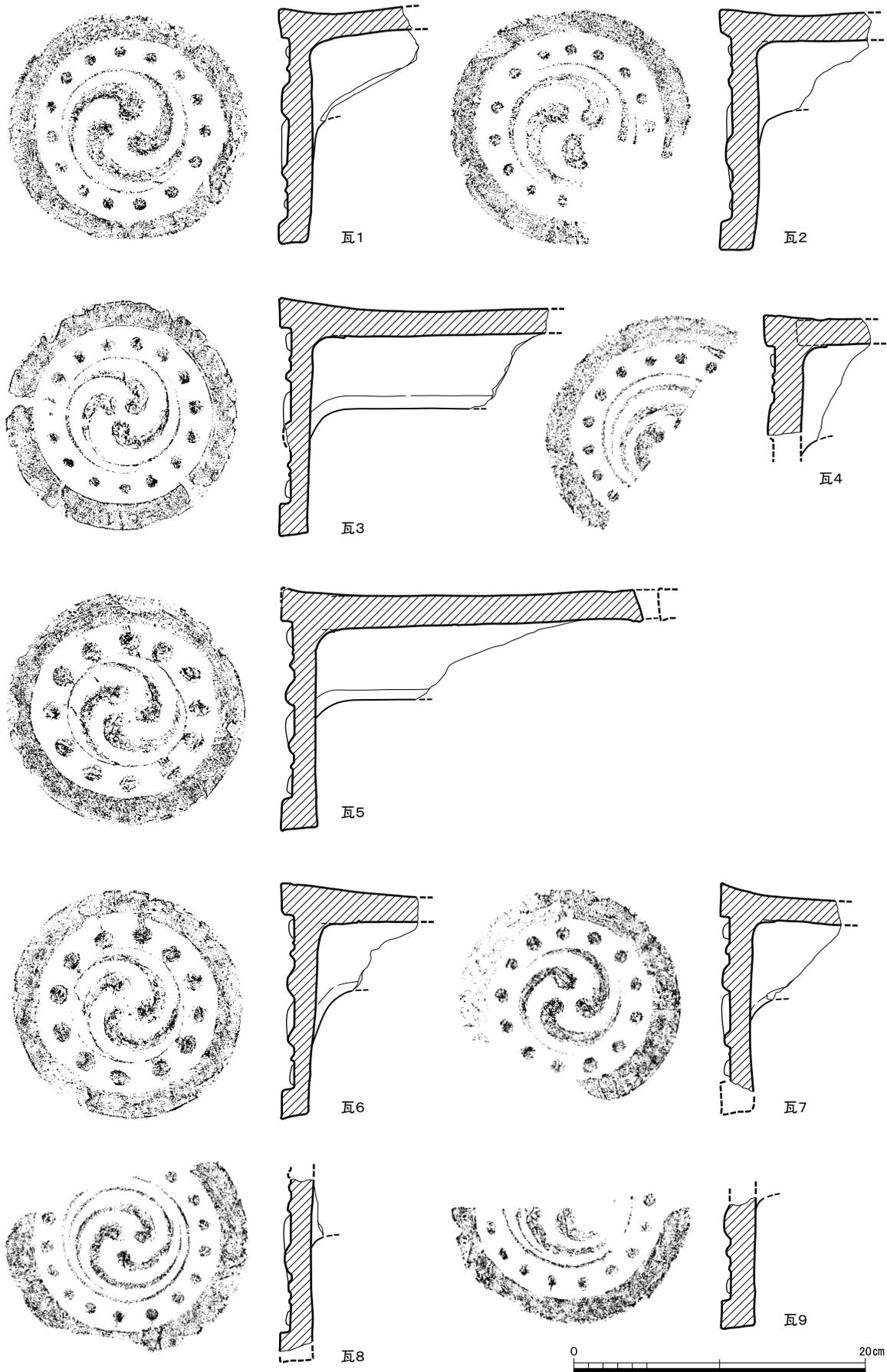


图24 軒丸瓦拓影及び実測図1 (1 : 4)

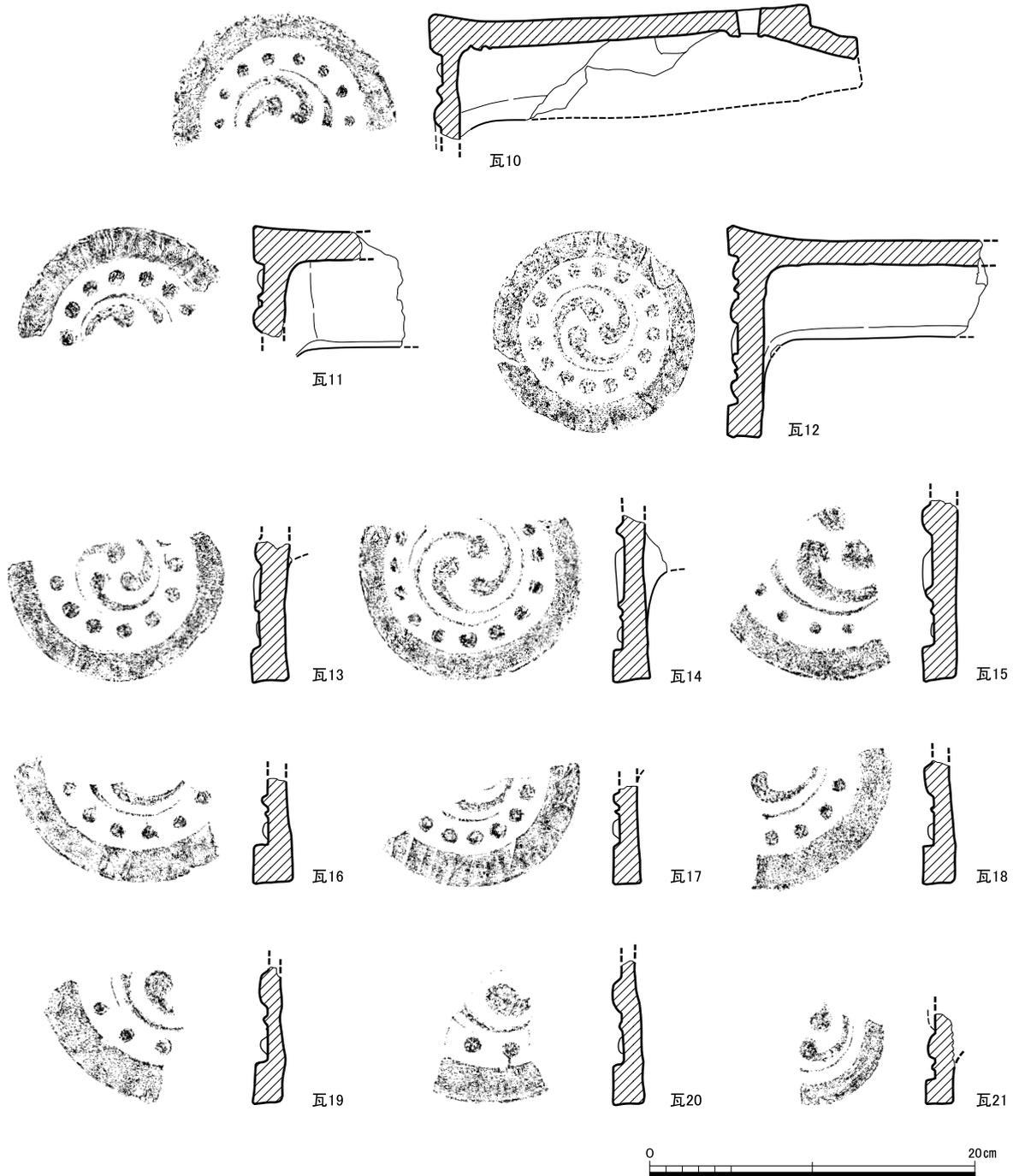


図25 軒丸瓦拓影及び実測図2 (1 : 4)

菊丸瓦 (図27、図版7)

菊丸瓦は10点出土した。菊丸瓦の形式と時期については、星野猷⁴⁾二氏・三木善則氏の分類に拠る。

瓦37・38はC形式。八葉の二重菊。無周縁で、ボタン状の中房をもつ。瓦37は丸瓦接合部にカキヤブリがみられる。1620～1625年頃。瓦39は十五葉の二重菊。無周縁で、ボタン状の中房をもつ。瓦40は十六葉の二重菊。無周縁で、ボタン状の中房をもつ。瓦41は二重菊。無周縁で、ボタン状の中房をもつ。瓦42～45は無周縁で、二重菊とみられる。瓦44は丸瓦接合部にカキヤブリが

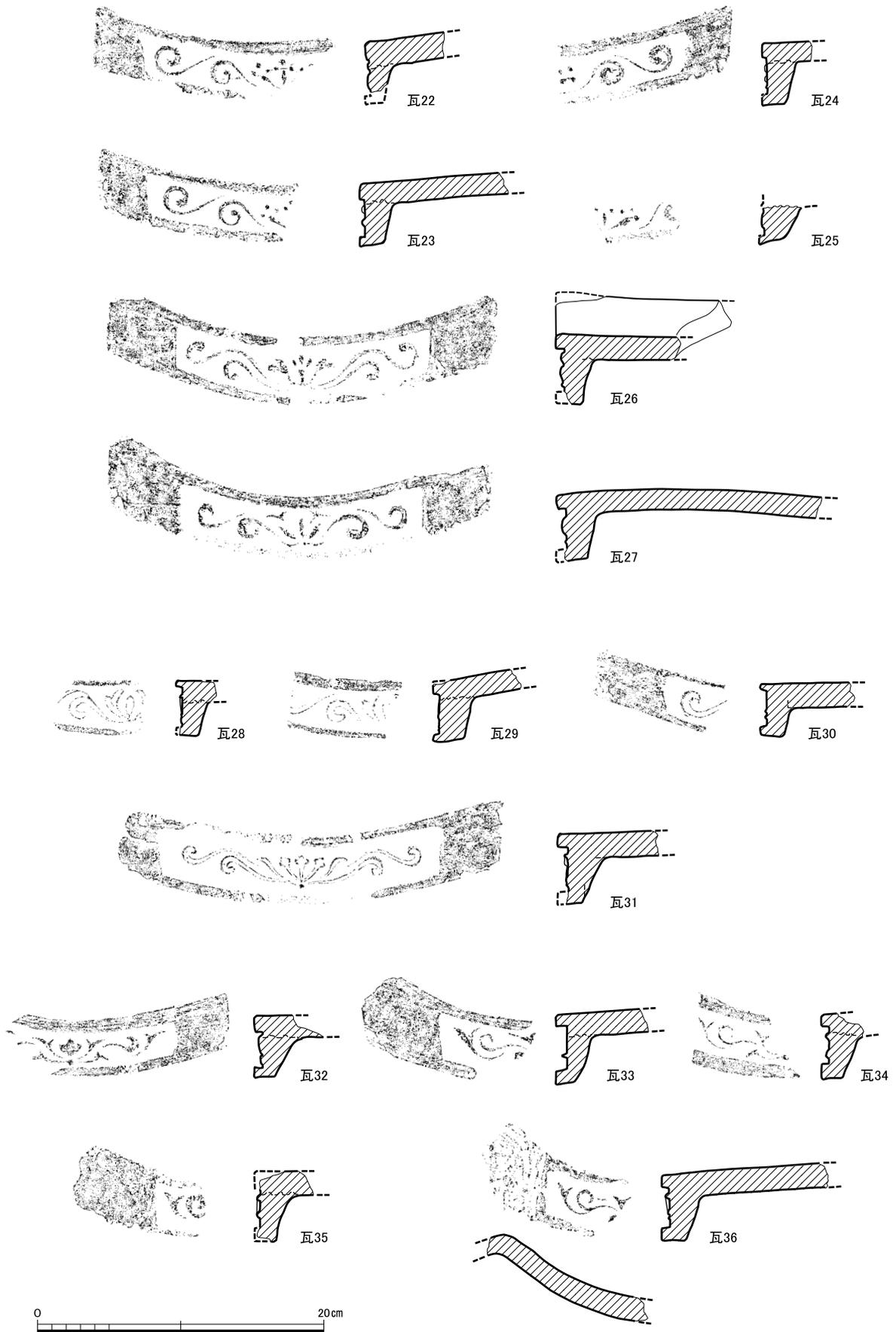


图26 軒平瓦・軒棧瓦拓影及び実測図（1：4）

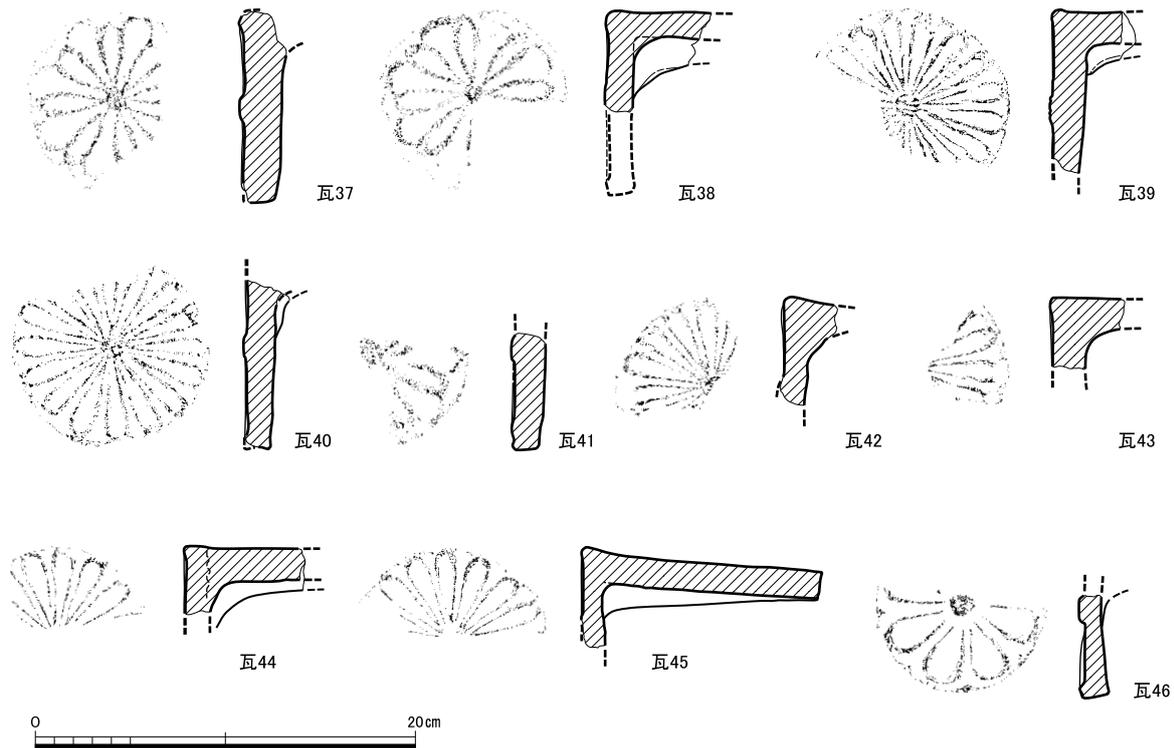


図27 菊丸瓦拓影及び実測図（1：4）

みられる。瓦45は丸瓦部が完全に残存する。二重菊の文様をもつ菊丸瓦は1620～1625年頃とみられる。

瓦46は無周縁で、ボタン状の中房をもつ。八葉の一重菊だが、花卉の間に間弁がみられる。

その他の瓦（図28、図版7）

瓦47は丸瓦。全長31.5cm。瓦48は平瓦。全長30.2cm。瓦49は丸瓦。凸面縁側の中央に「河内桶瓦平」と記された刻印がある。河内国の瓦師とみられる。ヘラ状工具による丸瓦長辺方向のナデがみられる。瓦50は棧瓦。端面に丸囲いの中に「十」の刻印がある。瓦51は輪違瓦。完形である。

（5）銭貨（図29、図版7、表7）

銭1は一分金。一分金は江戸時代に鑄造された金貨のうちの一つで、慶長6年（1601）から慶應4年（1867）にかけて発行された。一分は、小判一両の1/4にあたる。長さ1.5cm、幅0.9cmの長方形で、表面上部に扇、下部に五三の桐紋が表現される。扇の内部にも五三の桐紋が描かれており、上下の文様の間には、右側に「一」、左側に「分」の字が配される。裏面は上部に「光次」、下部に花押が記される。これは金貨鑄造を担った金座の当主である後藤正三郎光次によるものである。裏面「光次」の字の右上に「卓」字がみえるが、これは製造の際に「乾」の字の中央で切断されたと推察される。「乾」の印から、宝永7年（1710）4月に鑄造された宝永一分金であることがわかる。

銭2は洪武通寶。「武」の字体から、明太祖である洪武帝が洪武元年（1368）始鑄のものとみられる。

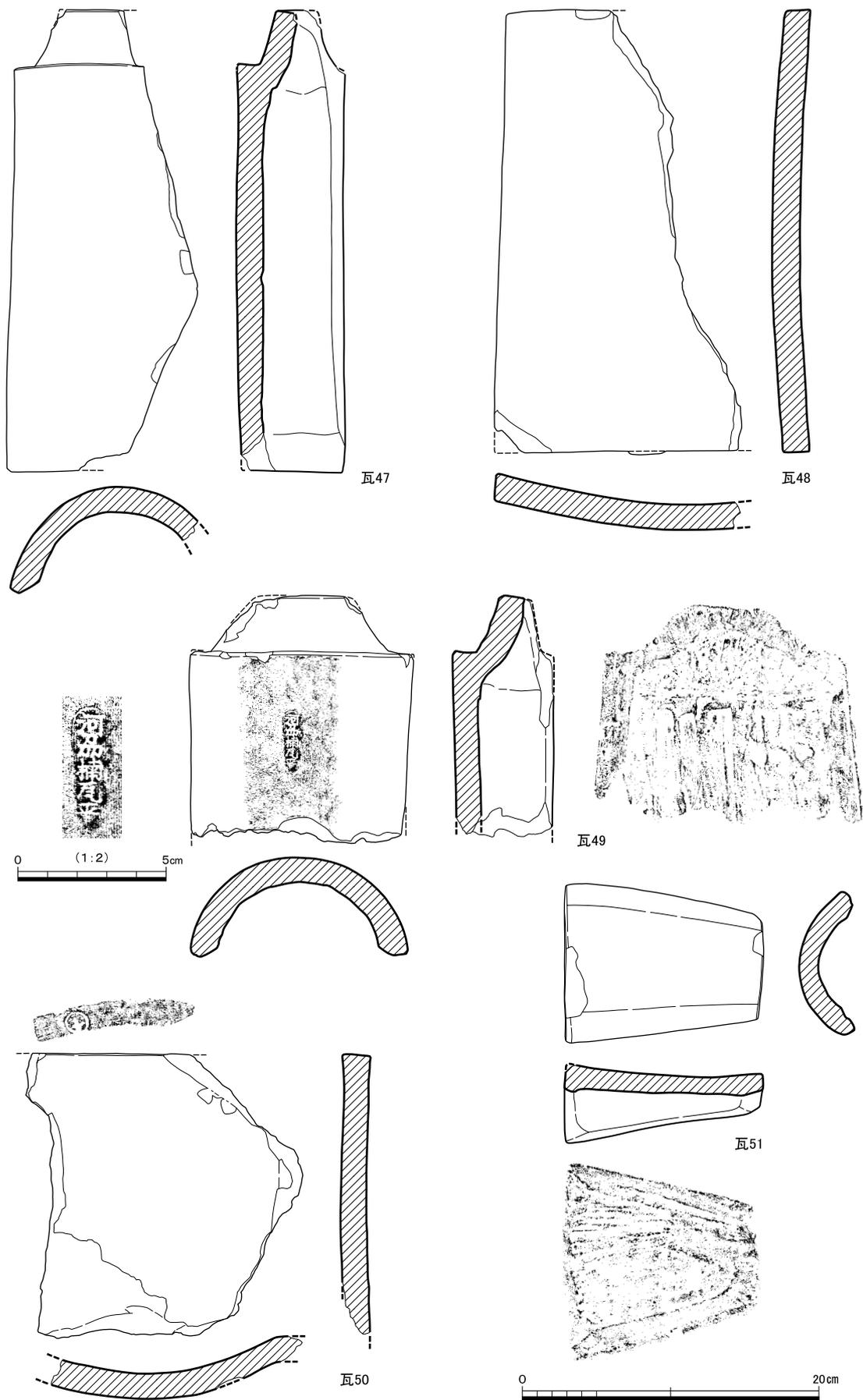


図28 その他の瓦拓影及び実測図（1：4）

5. まとめ (図31～33)

今回の調査では、2003年度に検出した米蔵南側の空間利用及び、淀城築城時に行われた整地の様相を明らかにすることができた。

まず、今回の調査地では江戸時代前期から中期、後期から幕末にかけての土坑やピットを検出した。江戸時代前期から中期の遺構密度は少なく、米蔵の南側の空地であったと考えられる。江戸時代後期になると、調査区全体は盛土され、調査区南端に土器・土製品の廃棄土坑が増加する。江戸時代後期に土地の利用法が変化したと考えられる。

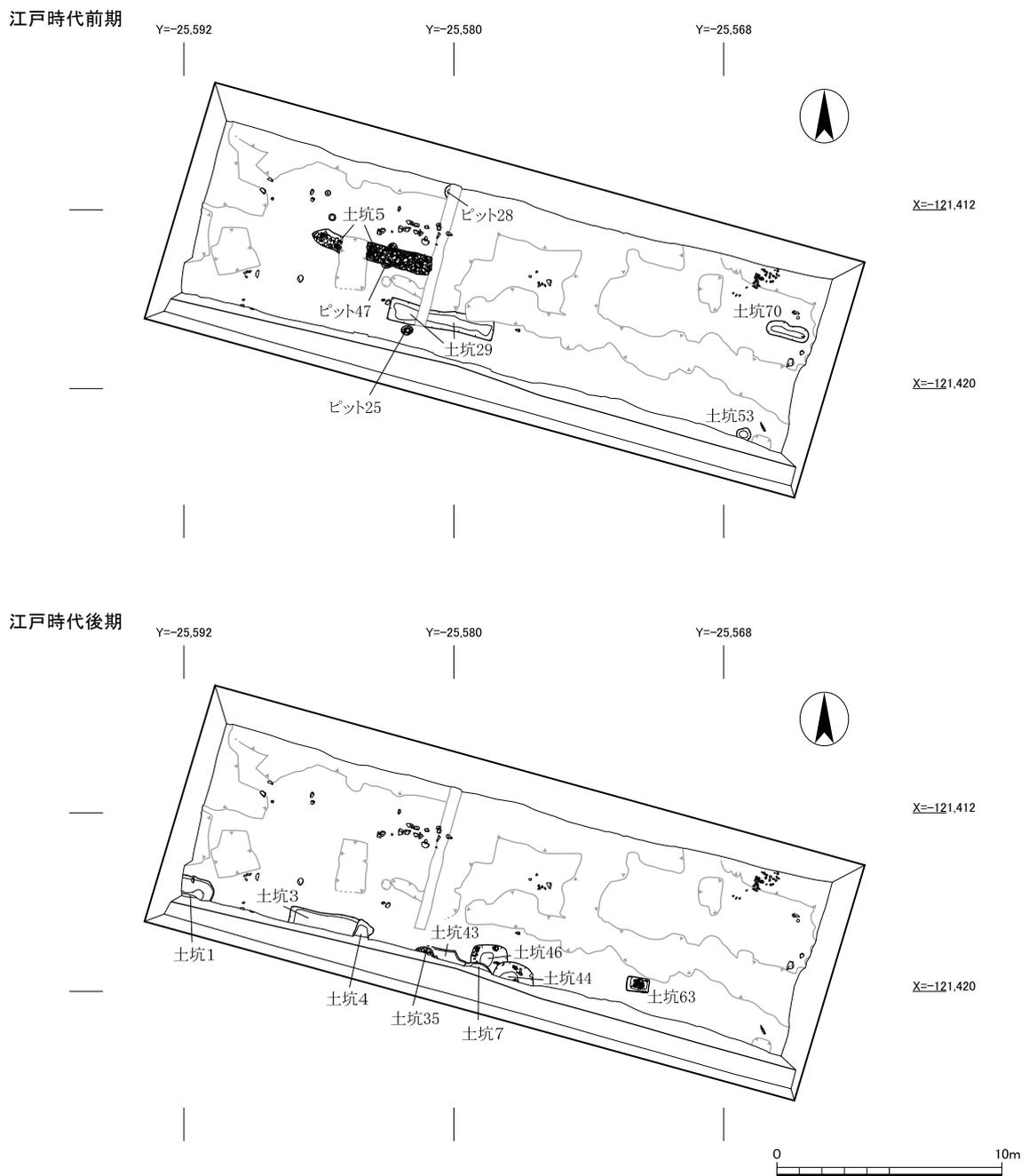


図31 遺構変遷図 (1 : 300)

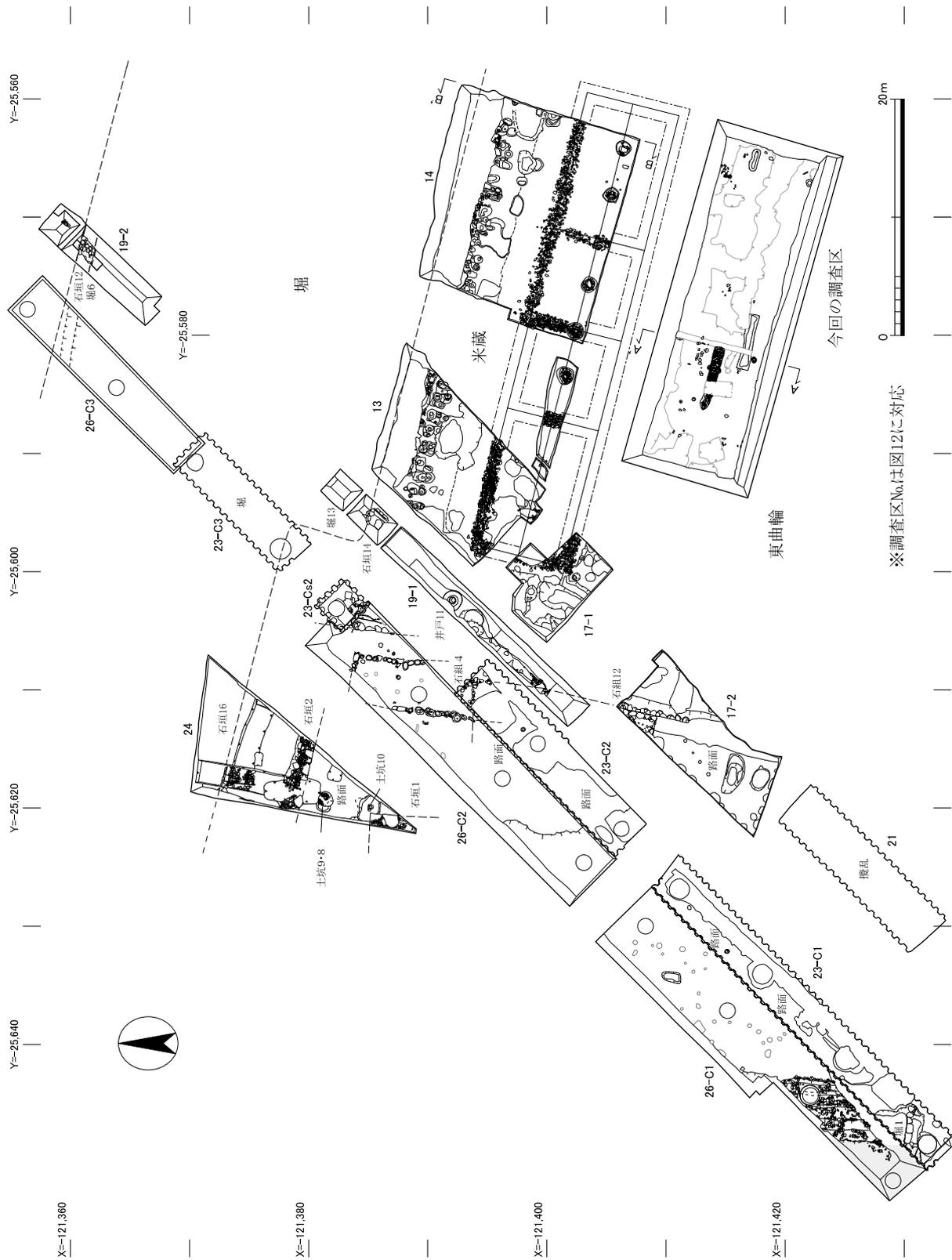


図32 東曲輪周辺における江戸時代の遺構配置図（1：500）

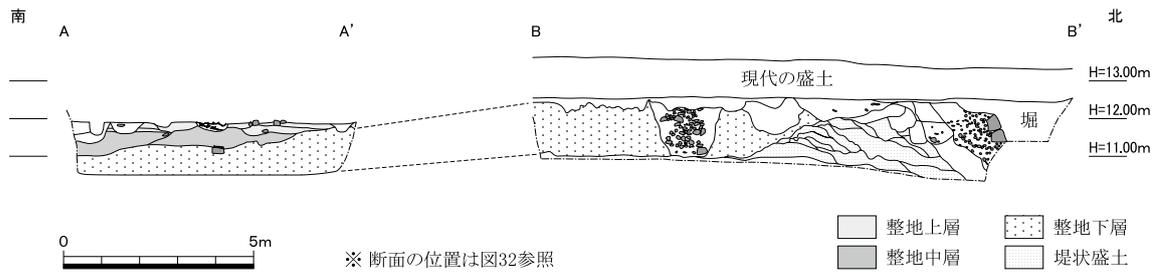


図33 2003年度及び今年度調査における江戸時代前期の整地（1：200）

つぎに、淀城築城時の整地方法としては、厚く積んだ粗砂層の上に粘質土や細砂・シルトなどを土手状に積み、最上面を粘土や砂質土などで互層に突き固めていたことが確認できた。本調査区北隣で行われた2003年度調査でも断割調査が行われているが、その際は今回の調査区北端で見られた粗砂層の標高11.80mよりも高い、標高12.00mで粗砂層を確認している。2003年度の調査区から今年度の調査区にかけて、粗砂層が北から南へ土塁状に盛られていたと推察できる。2003年度は、粗砂層よりも上層は検出できなかったが、今回の調査ではこの粗砂層の上に砂混粘質土などを盛り、さらに最上層を粘土や砂質土などで締め固めた状況を捉えることができた。

表4 出土土器一覧表

No.	器種	器形	出土遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率	胎土色調	備考
1	土師器	皿 S	断割トレンチ2粗砂層	9.6	—	2.0	80%	10YR7/2 にぶい黄橙	
2	土師器	皿 S	断割トレンチ2粗砂層	9.6	—	2.2	100%	7.5YR8/3 浅黄橙	
3	土師器	皿 Nr	土坑63	5.0	—	1.0	90%	7.5YR8/3 浅黄橙	
4	土師器	皿 Nr	土坑63	5.1	—	1.0	100%	7.5YR7/2 明褐灰	
5	土師器	皿 Nr	土坑63	5.2	—	1.2	90%	7.5YR8/3 浅黄橙	
6	土師器	皿 Nr	土坑63	5.2	—	1.1	90%	7.5YR7/2 明褐灰	
7	土師器	皿 Sb	土坑63	7.9	—	1.5	100%	5YR7/4 にぶい橙	
8	土師器	皿 Sb	土坑63	8.0	—	1.6	90%	5YR7/6 橙	
9	土師器	皿 Sb	土坑63	8.0	—	1.5	100%	5YR7/4 にぶい橙	
10	土師器	皿 Sb	土坑63	8.0	—	1.6	90%	5YR7/4 にぶい橙	
11	土師器	皿 Sb	土坑63	8.0	—	1.6	100%	5YR7/4 にぶい橙	
12	土師器	皿 Sb	土坑63	8.0	—	1.6	100%	5YR7/4 にぶい橙	
13	土師器	皿 Sb	土坑63	8.0	—	1.9	100%	5YR7/4 にぶい橙	
14	土師器	皿 Sb	土坑63	8.0	—	1.8	70%	5YR7/4 にぶい橙	
15	土師器	皿 Sb	土坑63	8.1	—	1.6	100%	7.5YR7/3 にぶい橙	
16	土師器	皿 Sb	土坑63	8.1	—	1.5	100%	5YR7/4 にぶい橙	
17	土師器	皿 Sb	土坑63	8.5	—	1.5	100%	7.5YR8/3 浅黄橙	
18	土師器	皿 Sb	土坑63	8.8	—	1.8	100%	7.5YR7/3 にぶい橙	
19	土師器	皿 Sb	土坑63	8.6	—	1.6	90%	7.5YR8/4 浅黄橙	
20	土師器	皿 Sb	土坑63	8.7	—	1.9	90%	7.5YR7/3 にぶい橙	
21	土師器	皿 Sb	土坑63	8.8	—	1.8	9%	7.5YR7/3 にぶい橙	
22	土師器	皿 Sb	土坑63	9.0	—	1.9	100%	7.5YR7/4 にぶい橙	
23	土師器	皿 S	土坑63	9.8	—	1.9	90%	5YR7/4 にぶい橙	
24	土師器	皿 S	土坑63	9.9	—	1.8	90%	10YR8/2 灰白	
25	土師器	皿 S	土坑63	9.9	—	1.8	70%	10YR8/2 灰白	
26	土師器	皿 S	土坑63	10.0	—	2.0	100%	7.5YR8/4 浅黄橙	
27	土師器	皿 S	土坑63	10.0	—	2.0	90%	5YR7/4 にぶい橙	
28	土師器	皿 S	土坑63	10.1	—	2.0	100%	7.5YR8/4 浅黄橙	
29	土師器	皿 S	土坑63	10.1	—	1.6	90%	10YR8/2 灰白	
30	土師器	皿 S	土坑63	10.2	—	2.0	90%	5YR7/4 にぶい橙	
31	土師器	皿 S	土坑63	10.2	—	1.9	90%	5YR7/4 にぶい橙	
32	土師器	皿 S	土坑63	10.2	—	1.9	100%	5YR8/4 淡橙	
33	土師器	皿 S	土坑63	10.2	—	1.8	70%	10YR8/2 灰白	
34	土師器	皿 S	土坑63	10.3	—	1.9	100%	7.5YR8/4 浅黄橙	断面に焼き継ぎ痕跡
35	土師器	皿 S	土坑63	10.3	—	1.9	100%	7.5YR8/4 浅黄橙	
36	土師器	皿 S	土坑63	10.3	—	1.8	100%	5YR8/4 淡橙	
37	土師器	皿 S	土坑63	10.3	—	1.9	80%	7.5YR8/4 浅黄橙	
38	土師器	皿 S	土坑63	10.3	—	2.1	50%	7.5YR8/3 浅黄橙	
39	土師器	皿 S	土坑63	10.4	—	1.7	90%	7.5YR8/4 浅黄橙	
40	土師器	皿 S	土坑63	10.6	—	1.7	90%	5YR7/4 にぶい橙	
41	土師器	皿 S	土坑63	10.6	—	1.8	90%	7.5YR7/4 にぶい橙	
42	土師器	皿 S	土坑63	10.7	—	2.0	90%	7.5YR8/3 浅黄橙	
43	土師器	皿	土坑63	11.0	—	1.6	100%	7.5YR8/3 浅黄橙	
44	土師器	皿	土坑63	11.0	—	1.7	100%	7.5YR8/3 浅黄橙	
45	土師器	皿	土坑63	11.1	—	1.9	100%	7.5YR8/3 浅黄橙	
46	土師器	皿	土坑63	11.1	—	1.7	100%	7.5YR8/3 浅黄橙	
47	土師器	皿	土坑63	11.2	—	1.7	100%	7.5YR8/3 浅黄橙	
48	土師器	皿	土坑63	11.3	—	1.8	100%	7.5YR8/3 浅黄橙	
49	土師器	皿	土坑63	11.3	—	2.0	90%	7.5YR8/3 浅黄橙	
50	土師器	皿	土坑63	11.3	—	1.6	90%	7.5YR8/3 浅黄橙	
51	土師器	皿	土坑63	11.4	—	1.8	90%	7.5YR8/3 浅黄橙	
52	染付	小杯	土坑1	6.0	2.6	4.1	50%	N9/0 白	
53	土師器	灯火具身	土坑3	杯部径6.6	14.0	(5.0)	50%	7.5YR8/4 浅黄橙	
54	施釉陶器	蓋	土坑4	7.5	—	2.4	100%	2.5Y8/2 灰白	
55	染付	小杯	土坑7	8.3	3.4	4.3	60%	N9/0 白	
56	施釉陶器	鍋把手	土坑7	—	—	(4.7)	100%	10YR8/4 浅黄橙	
57	施釉陶器	土瓶	土坑35	10.5	—	(9.1)	30%	10YR8/1 灰白	
58	施釉陶器	椀	土坑43	10.8	4.9	6.6	80%	2.5Y8/1 灰白	底部外面に墨書
59	染付	鉢蓋	土坑44	ツマミ径4.4	—	(3.6)	20%	N9/0 白	
60	染付	仏飯具	土坑44	7.1	3.7	4.9	70%	N8/0 灰白	
61	焼締陶器	播鉢	土坑44	34.1	14.4	15.0	100%	2.5YR5/6 明赤褐	

表5 出土土製品一覧表

No.	種類	出土遺構	幅・口径 (cm)	高さ・厚さ (cm)	胎土色調	備考
62	つぼつぼ	土坑44	2.2	2.4	10YR8/1 灰白	
63	つぼつぼ	江戸時代後期の整地層	2.9	2.2	10YR8/2 灰白	底部外面に墨書、底部に穿孔
64	ミニチュア皿	土坑46	4.9	2.2	10YR8/2 灰白	底部外面に墨書
65	ミニチュア皿	江戸時代後期の整地層	5.0	2.0	10YR8/2 灰白	底面外面に墨書
66	焼塩壺	断割トレンチ2粗砂層	6.0	10.3	5YR7/4 にぶい橙	体部外面に刻印
67	焼塩壺	江戸時代後期の整地層	6.4	10.0	2.5YR7/4 淡赤橙	体部外面に刻印
68	焼塩壺	土坑44	5.2	7.9	7.5YR8/4 浅黄橙	体部外面に刻印
69	焼塩壺	江戸時代後期の整地層	5.1	8.4	5YR7/6 橙	
70	硯	土坑29	7.5	1.9	N6/0 灰	
71	土人形 大黒	土坑46	2.2	3.6	7.5YR7/4 にぶい橙	
72	土人形 恵比須	遺構検出中	2.6	3.7	7.5YR7/4 にぶい橙	底部に棒状穿孔
73	土人形 布袋	土坑4	(2.9)	(3.6)	10YR8/2 灰白	
74	土人形 女性立像	土坑3	6.1	(9.5)	10YR8/2 灰白	底面に墨書、首部に棒状穿孔
75	土人形 女性立像	遺構検出中	5.6	(10.3)	10YR8/2 灰白	首部に棒状穿孔
76	土人形 女性座像	土坑4	7.9	7.5	7.5YR8/3 浅黄橙	
77	土人形 西行	土坑44	2.3	4.5	10YR8/1 灰白	
78	土人形 釣り人	江戸時代後期の整地層	4.0	4.8	10YR8/3 浅黄橙	一部に緑で彩色
79	土人形 馬	土坑3	10.0	10.8	10YR8/3 浅黄橙	一部に赤と黒で彩色
80	土人形 馬	土坑44	(8.3)	(5.5)	7.5YR8/4 浅黄橙	赤で彩色
81	土人形 馬	土坑44	(9.2)	(7.6)	7.5YR8/4 浅黄橙	
82	土人形 牛	土坑4	(5.9)	3.5	7.5YR7/3 にぶい橙	赤で彩色
83	土人形 狐	土坑46	2.6	4.6	5YR6/6 橙	底部に棒状穿孔
84	土人形 鷹	土坑35	3.5	4.6	10YR8/2 灰白	
85	土人形 雉	土坑46	3.8	3.4	7.5YR8/4 浅黄橙	
86	土人形 鯛	土坑46	6.6	4.1	10YR8/2 灰白	一部に緑釉、底部に棒状穿孔
87	箱庭道具 灯籠	土坑3	2.5	4.4	10YR8/2 灰白	底部に棒状穿孔
88	箱庭道具 塔	土坑46	4.0	4.1	10YR8/2 灰白	全体に緑釉
89	箱庭道具 舟	土坑3	6.0	2.0	2.5Y8/1 灰白	一部に緑釉
90	煙管	土坑4	(7.0)	1.2	10YR8/2 灰白	首部に褐色のライン
91	泥面子	土坑7	径3.7	1.2	7.5YR7/4 にぶい橙	
92	泥面子	土坑7	径3.8	0.9	7.5YR7/3 にぶい橙	

表6 出土瓦類一覧表

No.	種類	出土遺構	色調	文様・特徴
瓦1	軒丸瓦	土坑5	N7/0 灰白	右巻き三巴文、珠文15
瓦2	軒丸瓦	江戸時代後期の整地層	N5/0 灰	右巻き三巴文、珠文12
瓦3	軒丸瓦	土坑5	N3/0 暗灰	右巻き三巴文、珠文15
瓦4	軒丸瓦	遺構検出中	N3/0 暗灰	右巻き三巴文、珠文12
瓦5	軒丸瓦	土坑5	N3/0 暗灰	右巻き三巴文
瓦6	軒丸瓦	土坑5	N3/0 暗灰	右巻き三巴文
瓦7	軒丸瓦	土坑5	N3/0 暗灰	右巻き三巴文、珠文13
瓦8	軒丸瓦	攪乱	N4/0 灰	右巻き三巴文、珠文12
瓦9	軒丸瓦	江戸時代後期の整地層	N3/0 暗灰	右巻き三巴文
瓦10	軒丸瓦	土坑44	N6/0 灰	右巻き三巴文、丸瓦部に釘孔
瓦11	軒丸瓦	江戸時代後期の整地層	N3/0 暗灰	右巻き三巴文
瓦12	軒丸瓦	土坑5	10Y6/1 灰	右巻き三巴文、珠文16
瓦13	軒丸瓦	土坑46	N5/0 灰	右巻き三巴文
瓦14	軒丸瓦	断割トレンチ2粗砂層	N6/0 灰	右巻き三巴文
瓦15	軒丸瓦	断割トレンチ2粗砂層	N5/0 灰	右巻き三巴文、珠文13
瓦16	軒丸瓦	江戸時代後期の整地層	2.5Y8/1 灰白	右巻き三巴文
瓦17	軒丸瓦	ピット25	N3/0 暗灰	右巻き三巴文
瓦18	軒丸瓦	土坑5	N3/0 暗灰	右巻き三巴文
瓦19	軒丸瓦	排土	N5/0 灰	右巻き三巴文
瓦20	軒丸瓦	遺構検出中	10YR8/2 灰白	右巻き三巴文、珠文16
瓦21	軒丸瓦	遺構検出中	N3/0 暗灰	右巻き三巴文
瓦22	軒平瓦	土坑5	N4/0 灰	唐草文、E形式
瓦23	軒平瓦	ピット25	N5/0 灰	唐草文、E形式
瓦24	軒平瓦	ピット25	N4/0 灰	唐草文、E形式
瓦25	軒平瓦	土坑5	N4/0 灰	唐草文、E形式
瓦26	軒平瓦	土坑5	N4/0 灰	唐草文
瓦27	軒平瓦	土坑5	N3/0 暗灰	唐草文、F形式
瓦28	軒平瓦	土坑5	N3/0 暗灰	唐草文、文様複線、K形式
瓦29	軒平瓦	ピット25	10YR8/2 灰白	唐草文、文様複線、K形式
瓦30	軒平瓦	土坑5	N4/0 灰	唐草文、文様複線、K形式
瓦31	軒平瓦	土坑5	N6/0 灰	唐草文、文様複線
瓦32	軒平瓦	排土	N5/0 灰	唐草文、O形式
瓦33	軒平瓦	土坑35	N3/0 暗灰	唐草文、O形式
瓦34	軒平瓦	攪乱	N5/0 灰	唐草文、O形式
瓦35	軒平瓦	攪乱	N3/0 暗灰	唐草文、O形式
瓦36	軒棧瓦	土坑46	N5/0 灰	唐草文
瓦37	菊丸瓦	江戸時代後期の整地層	N5/0 灰	八葉二重菊、無周縁、小菊C形式
瓦38	菊丸瓦	土坑5	N4/0 灰	八葉二重菊、無周縁、小菊C形式
瓦39	菊丸瓦	土坑6	N5/0 灰	十五葉二重菊、無周縁
瓦40	菊丸瓦	江戸時代後期の整地層	N3/0 暗灰	十六葉二重菊、無周縁
瓦41	菊丸瓦	江戸時代後期の整地層	2.5Y4/1 黄灰	二重菊、無周縁
瓦42	菊丸瓦	攪乱	N4/0 灰	二重菊、無周縁
瓦43	菊丸瓦	ピット47	2.5Y7/2 灰黄	二重菊、無周縁
瓦44	菊丸瓦	土坑5	N4/0 灰	二重菊、無周縁
瓦45	菊丸瓦	土坑5	N4/0 灰	二重菊、無周縁
瓦46	菊丸瓦	土坑5	N4/0 灰	八葉一重菊、無周縁
瓦47	丸瓦	土坑5	N3/0 暗灰	
瓦48	平瓦	土坑5	N3/0 暗灰	
瓦49	丸瓦	土坑5	N5/0 灰	凸面縁側に「河辺楠瓦平」刻印
瓦50	棧瓦	土坑5	N4/0 灰	端面に「十」刻印
瓦51	輪違瓦	排土	N5/0 灰	完形

表7 出土銭貨一覧表

No.	名称	出土遺構	寸法(cm)	重さ(g)	備考
銭1	一分金	土坑70	長さ1.5×幅0.9	2.4	宝永一分金
銭2	洪武通寶	江戸時代後期の整地層	径2.2	3.2	
銭3	寛永通寶	江戸時代後期の整地層	径2.3	2.2	古寛永
銭4	寛永通寶	江戸時代後期の整地層	径2.4	2.8	古寛永
銭5	寛永通寶	江戸時代後期の整地層	径2.4	3.0	古寛永
銭6	寛永通寶	江戸時代後期の整地層	径2.4	2.3	古寛永
銭7	寛永通寶	江戸時代後期の整地層	径2.4	3.7	古寛永
銭8	寛永通寶	江戸時代後期の整地層	径2.4	2.9	古寛永
銭9	寛永通寶	遺構面直上	径2.4	2.8	古寛永
銭10	寛永通寶	江戸時代後期の整地層	径2.5	3.2	古寛永
銭11	寛永通寶	攪乱	—	1.4	古寛永
銭12	寛永通寶	江戸時代後期の整地層	径2.2	1.7	新寛永
銭13	寛永通寶	重機掘削中	—	1.4	新寛永

表8 出土石製品一覧表

No.	種類	出土遺構	寸法(cm)	重さ(g)
石1	砥石	土坑4	長さ(13.0)、幅5.6、厚さ1.3	
石2	碁石	土坑43	径2.2、厚さ0.4	2.7
石3	碁石	遺構検出中	径2.2、厚さ0.5	3.5

圖 版



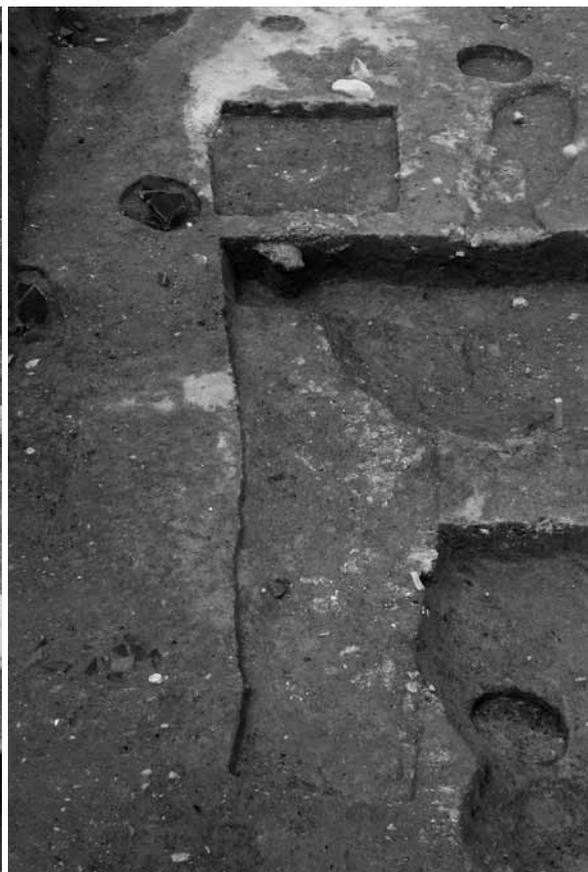
1 1区全景（東から）



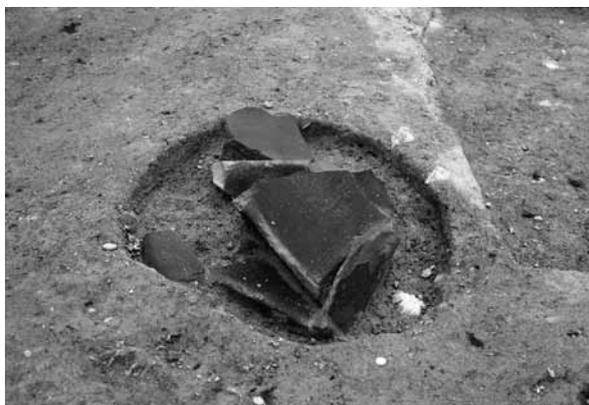
2 2区全景（東から）



1 土坑5検出状況（東から）



2 土坑29検出状況（東から）



3 ピット25検出状況（東から）



4 土坑29断面（東から）



5 ピット47瓦出土状況（北から）



6 土坑44断面（北から）



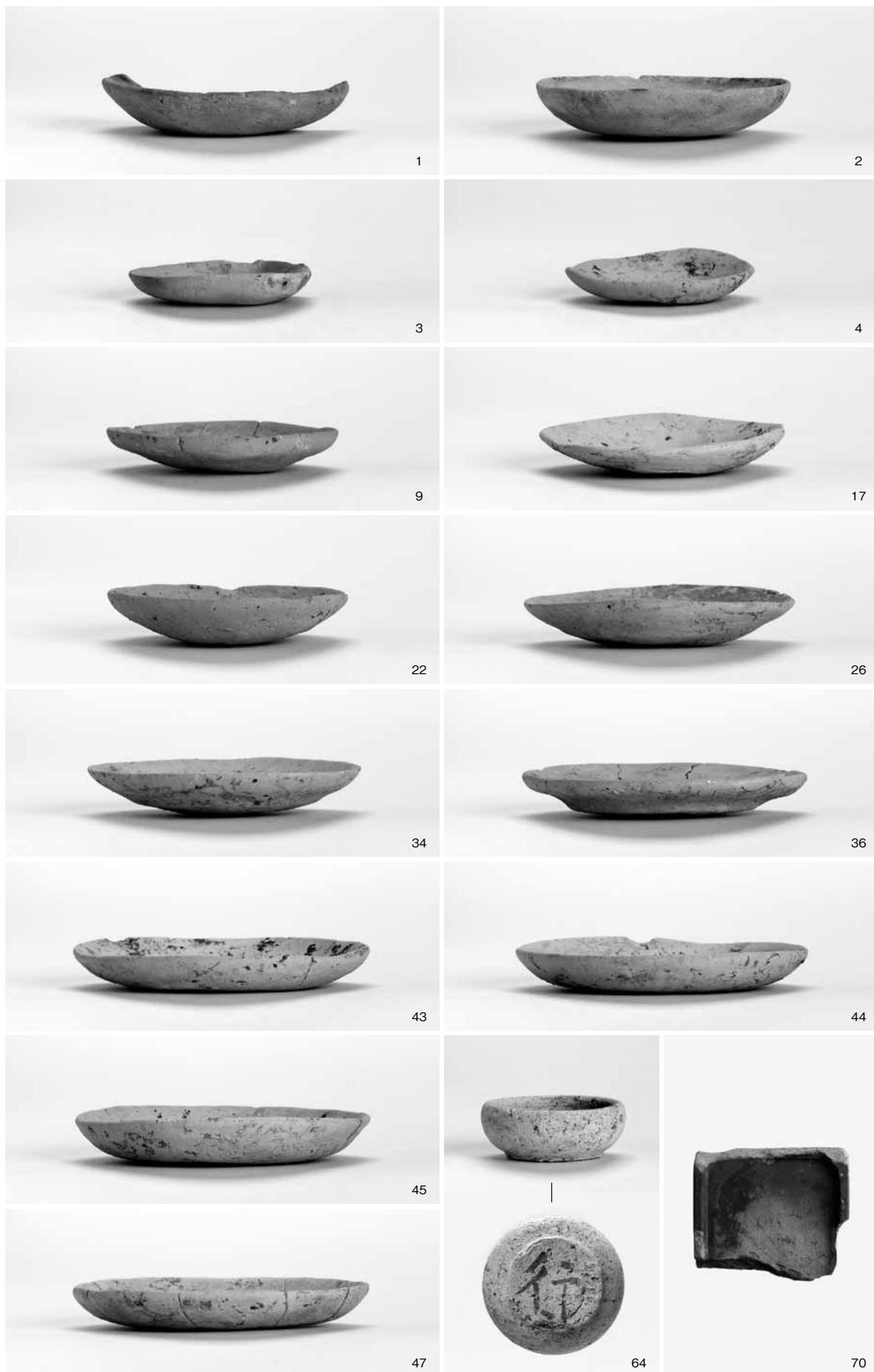
1 土坑63土器出土状況（南から）



2 断割トレンチ1南壁断面（北から）



3 石列6と断割トレンチ2西壁断面（東から）



土器類、土製品



瓦1



瓦2



瓦3



瓦5



瓦6



瓦7



瓦8



瓦12



瓦26



瓦27



瓦31



瓦22



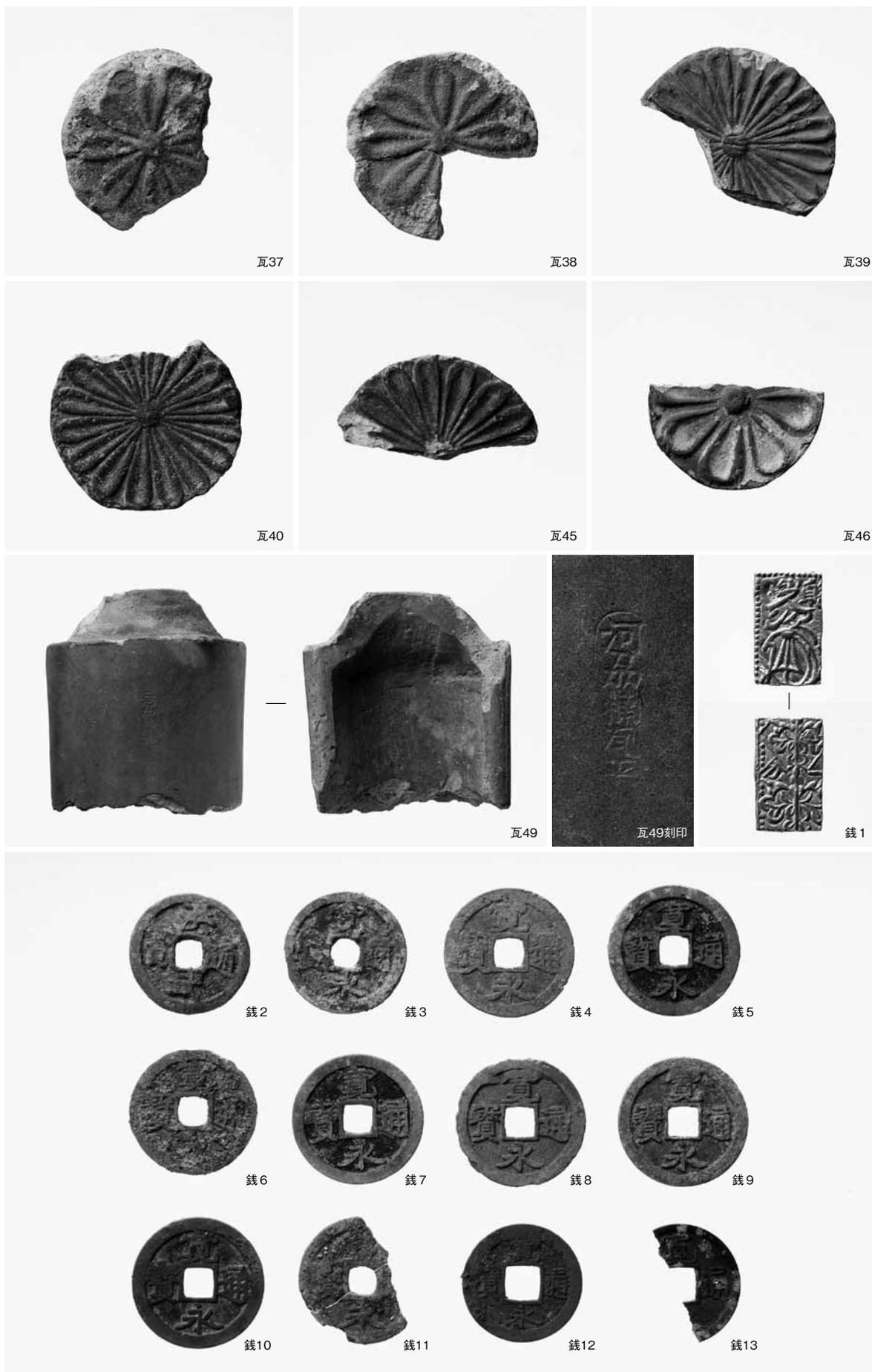
瓦28



瓦36



瓦32



菊丸瓦·丸瓦、錢貨

報 告 書 抄 録

ふりがな	なごかきょうあと・よどじょうあと							
書名	長岡京跡・淀城跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2017-4							
編著者名	松吉祐希							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2017年10月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なごかきょうあと 長岡京跡 よどじょうあと 淀城跡	きょうとし 京都市伏見区 淀池上町128他	26100	3 1191	34度 54分 19秒	135度 43分 12秒	2017年3月 21日～2017 年5月19日	330㎡	建物改築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長岡京跡 淀城跡	都城跡 平城跡	江戸時代前期 ～中期 江戸時代後期 ～幕末	土坑、ピット 土坑	土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、土製品、瓦類 土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、土製品、瓦類、金属製品、石製品		淀城築城の際に行われた整地の様相を捉えることができた。 土坑から一分金が出土した。		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-4

長岡京跡・淀城跡

発行日 2017年10月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961